

# 冒険と子どもたち

「冒険学校」のあゆみ



NPO 法人自然文化誌研究会

# 『冒険と子どもたち』 目次

## 1. はじめに p.1

木俣美樹男(前東京学芸大学附属環境教育実践施設長)

## 2. 冒険学校の基本的な考え p.2

## 3. 冒険学校の歩み p.6

岩谷美苗(自然文化誌研究会 前々事務局長)

## 4. 参加スタッフの思い p.10

川上確也 渡辺雄一郎 宮村連理 満川尚美 鈴木英雄

## 5. 冒険学の参加者および保護者の声 p.16

## 6. 冒険学校の活動プログラム p.20

## 7. 冒険学校の新しい行方 p.46

ぬくい少年少女農学校 ちえのわ農学校

沙流川冒険学校 タイ環境学習キャンプ こすげ冒険学校 おきなわ冒険学校

## 8. 討論～冒険学校がはじまるまで p.79

## 9. 終わりに p.81

小川泰彦(自然文化誌研究会 前事務局長)



のさちゃん



...



つつこみマン

# 1. はじめに

冒険学校を始めようと思ったのには 2 つの理由がありました。一つは、自分たちを常に現役探検家として鍛えることです。二つは、子どもたちを冒険に誘うように育てることです。東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部(以下、学大探検部)の独自性がここに見出せると考えたのです。私には、さらに三つ目の目的があり、自然や伝統文化の中での子どもの生態を学びたかったのです。当時、大学生相手の講義に慣れて、言い換えれば、自然や伝統文化についての学習体験の乏しい大学生あるいは大人に対する教育の可能性を疑い始め、子どもたちから始めないと環境学習の可能性は開けないのかと考えていたようです。

幸いなことに、当時の学大探検部には気の良い若者がたくさん集まっていました。しかし、多くの若い部員に熱意はあっても、活動資金はありませんでしたので、大学公開講座として企画をしました。担当係の方に相談に行きましたら、「どうして大学が子どもの講座を開くのか、前例がない」と相手にもされませんでした。例のごとく、温厚な私もこれでは納得できないので、「学生たちと子どもたちがともに学ぶ講座こそが学大にあってしかるべきだ」と強く反論しました。次第に声も大きくなり、近隣にお座りであった入学主幹(若い女性でしたがきっと今では文部科学省で高級官僚におなりでしょう)のお耳にも届いてしまいました。その結果、彼女の「やらせてあげなさい」との助言で、十分な資金援助を受けて企画は認められました。ただし、ご存知のように本来、働いた関係者が受け取るべき謝金など一切適切寄付していただいて、学生も教員 OB も無償ボランティアとして、子どもの参加費を軽減、あるいは家計状況により奨学金としました。

何百人の子どもや大人が盛り立ててきた冒険学校は 20 年近くの歴史をもち、東京都五日市町(現あきる野市)、埼玉県大滝村(現秩父市)、山梨県小菅村とベースキャンプ地は移動してきましたが、今でも新しい学生や子どもたち、多くの大人ボランティア、農山村の人々に支えられて続いています。いろいろなことがありましたが、すべて皆様と共有できる楽しい思い出がどんどん貯まっています。どれだけ私や、きっと皆様の人生を豊かにしてきたか、あるいはこれからも豊かにし続けたいと思います。一方で、意図せずですが、いくらかの影響を日本の環境学習活動や環境教育学の歴史に与えてきたと、参加者の皆さんとともに自負しましょう。常に、新たな方法論のパイオニアであり、一つの活動のスタンダードを創ってきたと思います。私たちはいつも現場にいて、人間や農山村のことを考えながら、現役で活動しています。

この冊子はなんと多くの楽しい思い出に満たされていることでしょう。冒険学校で育った皆さんと私たちは、これからもさらに次世代の子どもたちとともに生き、健やかに育っていきましょう。

木俣美樹男

(2005.8.8 カンタベリーの丘にて)

## 2. 冒険学校の基本的な考え

冒険学校では13年間の歴史の中で、試行錯誤を繰り返し、内容に工夫を凝らしながら活動を続けてきました。その基本的な考え方は子どもたちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を「待つ」という姿勢にありました。これは十分なプログラムを用意しながらも、選択は子どもに任せることです。極端に言えば、子どもは何も選ばず、森の中で一週間昼寝をして暮らしてもよいということでもありました。この考えは、現在の自然文化誌研究会の環境学習活動にも生きています。

大まかにまとめると以下の通りです。

- ① 秩父多摩国立公園に隣接した農山村の自然・文化環境の中で、教育的配慮のもとに野外活動を行い、地域の自然・文化遺産を継承するナチュラリストのジュニアリーダーを育成する。
- ② 安全が確保される限りにおいて、子どもの自主的な活動を尊重し、見守り、援助する。
- ③ プログラム選択の自由を可能な限り拡大する。これには子どもの発案による新しいプログラムを一緒に作ること、プログラムに参加しないで森の中で寝て暮らすことも含む。
- ④ 国立公園内での活動であるので、環境保全のためにロウ・インパクトを心がける。
- ⑤ 環境教育の研究普及活動の一環として、子どもと一緒に新しい自然接触・自然認識の方法を試行する。
- ⑥ 子どもが自然に抱かれて、心身を解き放ち、多くの友達を得て、満ち足りて家庭に帰ることを期待している。

(NPO 法人自然文化誌研究会 H.P.より引用)

冒険学校の実施概要としては、参加対象者は小学3～6年生で、40名程度の参加者が2～3コース(村・川・山コースなど)に分かれて、6泊7日の期間でキャンプ生活を行いました。活動は1988年より13年間継続し、第1期～3期までが東京都西多摩郡五日市町(現・あきる野市)、第4期～13期までが埼玉県秩父郡大滝村中津川地区(現・秩父市中津川)がフィールドでした。講師およびスタッフは、東京学芸大学冒険探検部を中心とした大学生、地元住民を含む専門家(地質学・郷土食・染織家・工芸家)等で、スタッフと参加者の中間的な存在として中高生のジュニアリーダーを設けていました。



「冒険学校の基本的な考え」について、「FSI冒険学校報告書 1989 p6～10」「野外における環境教育 通巻第4号 1990 p5～6」にすでにかかれていますので、全文を引用します。

## 「第1章 冒険学校開催の準備

冒険学校は私たちの教育に対する想いを実践する試みである。教育をめぐる現状を批判するだけにとどまっている限りは、荒廃した教育環境をいつまでも修復することはできない。ささやかでも新しい実践を試み、私たちの子供のために望ましい学習システムを拓く努力をすべきであろう。前例のない実践を行うには解決せねばならない多くの問題があった。広く批評を求め、今後の改善に資するために小冊子としてここに記録を留めるものである。

冒険学校は10歳前後の子供のための野外環境教育である。現在の息苦しい教育状況から子供たちを脱け出させるために、野外環境教育は有効な方法論と考えられる。

### 1.開催までの経緯と準備

総合的な野外教育活動を実践することを決めたのは、1987年夏の東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部(略称学大探検部)の秩父合宿(第5回総会・研修会)においてであった。その後の12月20日の『野遊びマニュアル』第1回編集会議の際に、東京学芸大学公開講座として附属野外教育実習施設から申請を試みることになった。個別に積み上げた実践を文献で補足して『野遊びマニュアル』を作るというのでは、既刊の類似書の域を越えることができない。そこで私たちの野外教育の方法論を総合的に実践して、良否・過不足を確かめてみようということになったのである。ここに至って、総会の結論と具体的な動機が一致することになった。

1988年1月になって、大学事務局教務課現職教育係に申請にあたって事前相談を行ったところ、子供を対象とした公開講座を開催できる可能性はあるとのことであった。しかしながら、2月になり申請書を提出する際になって、次の3つの問題が指摘された。すなわち、(1)公開講座は「成人その他」とあって、子供を対象にした事例はほとんどない。(2)長期間子供を預かって、万一の事故の責任は誰がとるのか、(3)多数の講師が長期間宿泊をして行う講座の予算要求方法に前例がない、である。これらの他にも初の試みには多くの問題点が残されたが、教務課の好意で申請は受理されることになった。

大学における事前準備の一方で、本講座は五日市町教育委員会と共催で、町営の青少年旅行村で行うことなど、現地受入れ側との事前相談を進めていた。正式の共催依頼状が学長名で実際に発せられたのは、申請が認可されて後の4月28日付であった。

準備のためのスタッフの全体会は4月17日にもたれ、プログラムの内容・役割分担等が話し合われた。教職員向けと子供向けの2種類の案内状(資料1)は5月6日付で、都内の全公立小学校へは区市町村教育委員会を通して、全私立小学校へは直接各校あて送付した。その後1週間以内に、連絡先とした現職教育係と木俣研究室の電話は多数の通話で麻痺し、30名の募集定員はすぐ大幅に越えてしまった。この状況に対応して、5月23日付で申込要項(資料2)を参加希望者に送付し、参加者を決めるための資料として児童・保護者に簡単な作文を求めることにした。現地協力者との打ち合わせのため、6月11日に五日市町において秋川野外教育研究会を開催した。



6 月末日で参加申込みを〆切り、提出された作文を数名で反復熟読の上、参加児童を決定し、7 月 1 日付で事前説明会・事前指導の案内状(資料 3)を送付した。その他の児童に対しては参加できない旨のお知らせを同時に発送した。

7 月 10 日の説明会には 6 名のスタッフが出席し、33 名の保護者と若干の児童の参加があった。開催の経緯・費用・保険・承諾書等について説明し、相互に意見交換を行った。7 月 24 日の事前指導には 19 名のスタッフ、6 名の協力者のほか、児童 41 名・保護者 40 名ほか若干の同伴者があった。事務連絡の後に、自己紹介、野外料理(そうめん流しとバーベキュー)、野外ゲーム等を行った。その後、スタッフの打合せ会を行い、詳細な準備メモの作成と冒険学校運営方法について全員の合意が得られるように十分な意見交換を行った(資料 4)。

この様に参加者に対応する一方で、事前の現地実踏を行った。7 月 22 日には養沢および大岳鍾乳洞、ベースキャンプとなる青少年旅行村を中心に、7 月 31 日には軍道紙工房と秋川の沢歩きを、8 月 9 日には刈寄山の登山コースを、8 月 11 日には青少年旅行村周辺の増水状況を実踏した。

7 月末日には準備のためのしおり(資料 5)。健康カード(資料 6)を参加者に送付し、8 月 15 日には直前連絡を送付した。一方で、野外活動用の資材・装備の梱包・チェックを行い、教務課の好意により大半は大学のトラックで、一部はスタッフの自家用車 3 台で、現地に運送した。さらに、子供の急病にそなえるために、現地秋川診療所に事前の協力依頼を行った。

冒険学校開講日の前日、8 月 20 日に 2 張の行事用テントで本部を設営し、資材・装備の整理を行った。すでに半数のスタッフは集合しており、翌日の予定ミーティングを行い、開講準備のすべてを完了した。

(木俣美樹男)」

「野外における環境教育 通巻第 4 号 1990 p5~6

## 第 1 部「子供のための冒険学校」(第 2 期)

私たちの子供の教育に対する想いを実践する試みとして、昨年より始めた冒険学校は第 2 期目となった。この間に地球環境問題がクローズアップされ、ますます環境教育の大切さが認められるようになった。10 歳前後の子供たち向けの冒険学校は野外における環境教育の有効な方法と考えられ、今後、理論的な整理とさらに新しい実践を試み続けたいと考えている。児童およびその保護者の協力によって得た資料の分析は改めて別に報告する予定であり、ここには第 2 期冒険学校の概要を記録するものである。

## 第 1 章 冒険学校の基本理念と開催準備

総合的な野外環境教育活動として第 2 期冒険学校を終了した現在、再び初心にかえってその基本理念を簡潔にまとめるとともに、第 2 期の開催準備について記録にとどめる。

## 1.基本理念

冒険学校実施のもっとも基本的な考え方は、子供たちの自主性を尊重し、行動を促すのではなく、行動を待つという姿勢にある。十分なプログラムを用意しながらも、選択は子供に任せることである。極端に言えば、子供は何も選ばず、森の中で一週間昼寝をして暮らしてもよいということでもある。

野外での活動は常に状況が新しく変転するので、いつも危険と隣り合わせである。冒険学校の安全に対する考え方は、不慮の事故には万全をつくすが、それでも万が一はありうるとの前提にたって対策をたてることである。現状で可能な万全の準備とは、冒険学校の良好な運営をすること、健康管理を充分にし、医療機関と密接に連絡をとること、冒険学校スタッフの能力を高く維持すること、できうる限り高額な保険をかけること等である。これらのうち医療機関については開催地には比較的多く存在しており、もっとも近い秋川診療所には冒険学校の趣旨理解の上、大変好意的な協力を得ている。保険については参加児童および全スタッフに対して一週間の旅行保険(死亡・後遺障害 58,460,000 円、入院日額 15,000 円、通院日額 10,000 円)をかけた。

冒険学校のプログラムは模式図に示した野外教育実習施設と学芸大学探検部で共同開発している環境教育プログラムを適用している。人間にとっての自然には3つの相があると考えられるので、基本プログラムは(A)自然誌・(B)文化誌・(C)世界観によって構成される(木俣 1989)。これら(A)(B)(C)は相互につながりがあるので関連プログラムとして(D)(E)(F)、統合プログラムとして(G)遊戯がある、さらに、環境教育プログラムを進めるためには人々の協力のネットワーク(H)が必要である。たとえば、自然観察は(A)、林業体験は(D)、炭焼きや紙漉は(B)のプログラムであり、この様な一連の流れによってスタッフの側ではプログラムを構成し、用意した。これに対して、子供たちの側には自主的にプログラム選択が任せられているので、各自の好みに従ってプログラムは再構成されることになる。子供たちの詳細なプログラム選択の変化については改めて別に報告することにしたい。

(木俣美樹男)

※木俣美樹男(1989)「日本人の自然観と環境教育」月刊社会教育 第33巻10号:6~14。)」



### 3. 冒険学校の歩み

私も2人の子供を産んで、冒険学校をやっていたあの頃を懐かしと思う年齢になってしまいました。最近やたらと昔を懐かしむようになっちゃって、国分寺の「ほら貝」で飲みたいな一とか、山小屋作ったな一とか、冒険学校のあれやこれやを茶などをすすりながら思い出します。一生懸命突っ走っていたあの頃は、まさか青春だったんじゃ！と今頃気がついたりしています。冒険学校で思い出したことをボケないうちに書いておこう！と筆をとりました。（岩谷美苗）

#### 五日市時代(第1～3期)

初めの第1期～第3期までは、東京都五日市のキャンプ場で冒険学校を行っていました。「生活文化体験グループ」と「自然体験グループ」の2つかなんかに別れていたと思います。結構いろいろな人を講師に呼んだり、地元の子供たちの参加があったり、本部は行事用テントだったり、いろいろありました。本部の行事用テントは屋根があるだけで下はぼこぼこ、ここで本部のスタッフは寝ていました。あまりに居住性が悪いので、木俣先生(本部)が「小川君、山小屋を作りませんか？」と持ちかけたくらいです。もちろん木俣先生のため、その頃探検部員だった小川他学生は、学業を犠牲にして約2ヶ月住み込んで小屋を作りました。第3期では小屋が完成し、本部になったのですが、地主さんが代わったり、違法建築だとか言われたりして、せっかく作った小屋も1年で解体しました。



第1期で思い出深いのは、川沿いのテント泊グループのテントが流されたという事件です。寝ているうちに増水して夜中にキャンプ場にどやど

やと戻ってきました。大変だった様子はたぶん佐藤さんが書いてくれるでしょう。

あと、川といえば夜中に子供用のゴムボートで川くだりをしていたことです。子供たちが寝静まった夜、月明かりの中1人で下る快感を覚えています。「ナミヘーがいなくなった！」と探されていたらしいのですが、そうとも知らず、私はサルのように何度も下っていたのでした。心配かけてごめんなさい。



でも、五日市って奥秩父より都会なのでスタッフは夜、喫茶店で息抜きをしていた人もいたようです。私も行きたかったのですが、誰にも誘われなかったのも、一人「冒険新聞」をプリントゴッコで每晚刷っていました。あなたは冒険新聞を覚えていますか？手間がかかって大変な割には誰も覚えていない影の薄いプログラムです。うーらーめーしーやー



## 奥秩父 造林小屋時代(第4～5期)

五日市で小屋を解体し、落ち込んでいるところへ営林署の小屋使ってみないかという話が来ました。奥秩父は遠いけど行ってみたら自然が深い良いところ。確か4期5期は営林署の小屋を少しリフォームしたり、簡易トイレを運んだりして使いました。しかし、ここは、山が深すぎるせいか、電気が無く、おまけにトイレがいっぱいになっても汲み取りには来てくれません。汲み取りはやらねばならないし、買出しも大変です。道も舗装されていないので、みやもっちゃん(宮本透さん)や木俣さん他、大勢の人の車がパンクしました。水道も無いので食器を洗うのは大変です。それに小屋に長く食器や食べ物をおいておくとカビてしまったり、ネズミに食べられたり、まさに自然との戦い。冒険学校が始まる前に疲れました。



そこで、少し下流のキャンプ場(中津川村キャンプ場)を利用するようになったのです。民宿中津屋の進ちゃんやみちえちゃん、キャンプ場の幸島さんなど村の人と少しずつ仲良くなり、村の人を講師にいろいろなプログラムを行いました。でも、食事作りだけは大変だったな。食料品を注文してキャンプ場へ持ってきてもらうようにしたのですが、ジャガイモ20個と注文したら本当に小さいジャガイモが20個来たり、注文品が来ても川コースの方へもって行き忘れたり・・・バーベキューなのに焼肉のタレを渡し忘れ、本当に怒られました。そのとき食べ物の恨みは怖いと感じました。





## 中津川村キャンプ場 本部時代(第6期～13期)

だんだん川コース(造林小屋)と、村コース(キャンプ場)、山コース(甲武信岳～十文字峠縦走)と3つのコースが定着していました。私は山コースが一番おいしいと思っています。荷物は重いのですが、水がうまいし、カレーがうまい。山で食べるものすべてうまいからです。少人数でほのぼのしてよかったなー。



川コースは生活自体が大変なんだけど、スタッフの異様な一体感みたいなのがあって、同じ人がやりたがっていた。山から川コース、村コースへ行くとなんか都会になじめない田舎者になったような感じでした。大勢すぎてやたらうるさく感じた。でも川って晴れてなんぼのコースで、雨だとずーと小屋の中で藍のたたき染めの修行となるのだ。



でも私は村コースも好きだった。キャンプ場には温泉があるし、村の人(山中菊枝さんとか中津

屋さんとか幸島さん)にいろいろ教わったり、面白いことがたくさんできた。



中でも村コースでニワトリをつぶして食べるプログラムが忘れられません。ニワトリを食べる食べないと大論争になり、子供たちはまじめにやってみたいという子と不真面目に殺せー！という子がいて、そして1週間かわいがっていた子の「なんでこんなに食べ物があるのに殺さなければならぬのか」という正論のもとに食べるのをやめたのです。しかし、私が忘れられないのはそのプログラムの裏話。冒険学校が始まる前にニワトリをもらってきて秩父まで運んだことです。ダンボールに入れて森田さんと2人、途中でラーメン食べたり、のんびり秩父へ行きました。しかしあまりの暑さにダンボールの中で3羽死んでいました。「あー水を入れておけば・・・」と反省しても後の祭り。せめておいしく食べてあげなければ・・・と翌日解体しましたが、血は固まって抜けません。燻製にしたりして食べたけど・・・ごめんなさい、ニワトリちゃん。そして冒険学校では新しいジョンとジョセフィーヌというニワトリを持ってきてもらい(名前は子供たちがつけたんだけど)、冒険学校中には食べませんでした。終わってから飼う事もできなかったの、子供たちに内緒でまた私たちは殺生をしました。こっちはおいしかったです。

## おまけ～「冒険学校で出会った数々の迷言・珍フレー集」

冒険学校でのスタッフは 1 週間ストイックな生活を強いられる。出縄さんという人は、きれいに丸く刈り込んだ植木を見ていった。「**おはぎ食べたーい！**」

あがさちゃんというカナヘビ好きな小学生の女の子がいた。なんでカナヘビが好きなの？と聞くと「**なつかないところが好き**」と言っていたのが印象的だった。

無口な柏木くんの相づち「**はあ**」…足折って痛そうだったなー

痛いといえば、まっせ(間瀬貴久)。**石の専門家なのに**、ハンマーで石を砕く時に、**自分の指を砕いてしまった**！！わざわざ名古屋から駆けつけたのに、冒険学校の初日でリタイア…。

川上さんは川コースから村コースに戻ってくると膝が**ボロボロ**でした。バイクでこけたらしい…。

片づけのため中津屋に泊まっていた。記録的な台風が来て、中津川地区は陸の孤島に…。そのおかげで？自衛隊のヘリコプターで帰ったトーマス太郎。「**俺、初めてヘリに乗ったよ！**」

そういえば一時期、川コースでは「**裸族**」が流行っていたなあ…。

山コースで甲武信小屋の**2 階から飛び降りた**クロ(黒澤)。寝ぼけていたのか？酔っ払っていたのか？無傷だったのは奇跡ですよ！！

鈴木英雄さんの自己紹介「鈴木と言います。キムタクと呼んでください。」**これはずるい**。1 週間、子どもたちは鈴木さんのことを「キムタクー！」と呼んでいた。

あと、毎回、献立を発表するのが面白かった。「今日のメニューは、なんとご飯！」うおっー！！**「味噌汁！」**うおっー！！**歓声が上がっていた。**

## 4. 参加スタッフの思い

冒険学校には数多くのスタッフが参加してくれました。数名のスタッフが冒険学校の思い出などを寄せてくれたので原文のまま掲載します。(順不同 敬称略)

【川上 確也】～冒険学校のおぼろげな記憶の一部分

第1回目に参加したとき、自分の担当は木工と牛の乳搾りだった。

訪れたのはごく小規模の地元の酪農家。大きく乳を張り出した牛。そのうちの一頭は、乳が地面すれすれの大きさ。何かの拍子で地面にこすれそう。これでは衛生上良くない。そんな理由からだと思うが、この牛はなんとブラジャーをしていた。

乳牛にもブラジャーなるものがあることをこのときはじめて知った。

はじめて知ったり、はじめて体験したりと、大学生で東京育ちの自分にとっては、“子どものための”というより、自分のための冒険学校でもあった。

また違った意味での冒険させてもらった。先ほどの酪農家の方との交渉や打ち合わせ、何の知識もないのに担当することになった牛の乳搾り。確か実施の数日前に付け焼刃で畜産の専門書を買って、ワークシートをつくった記憶がある。(ホルスタインとジャージーの違いをこのときはじめて知った。)

木工も今考えても、いや、あの時考えても、かなりいいかげんなものだった。確かに木工は専門的になった。しかしそれは、工作台がしっかりとあって、万力や電動糸鋸などの設備があったことだ。野外での木工などまったくの経験なし。あのとき子どもたちにはちょっと申し訳ない気がするが、それでも喜んで取り組んでいた姿はなんとなく覚えている。

何回目だったか忘れたが、冒険学校も無事に終わり、自分の車に荷物を積んで、でこぼこの山道を帰る道すがらのこと。あの事件は起こった。

行きと同じように、大きな石がゴロゴロ、ところどころ挟り取られた大きなわだちを懸命に避けながら、慎重に、だけど、けっこうスピードを出して運転していた。と、その時。ガシッ！といやな音が振動とともに足元から聞こえてきた。「こすったか・・・」と思ったが、気にせずに運転。しばらくすると、車内にたちこめるガソリン臭。「これはやばい」。車の下を覗き込んでみると、なんとかなりの勢いでガソリンがもれているではないか。亀裂に雑巾をねじりこみ応急処置。これはいけないとばかりに、近くのガソリンスタンド目指してかつとばした。ガソリンの残量を示す燃料計が見たことのないようなスピードでエンプティーに下がっていくのが分かった。これじゃあ、戦車並みの燃費だ、となぜか愉快になり、笑みまでこぼれた。きっとキャンプ生活で疲れていたからだろう。

ガソリンスタンドの店員に「引火していたら危ないところでしたよ！」とお叱りを受けたのをはつきりと覚えている。(車は後日取りに行った。)

まだまだあげればきりが無いが、最後に、この冒険学校の良さは、学芸大のOBの方をはじめ、学生以外の人たちと出会い、じっくり話ができることであろう。いろいろな話を聞いて、触発されたことも多かった。人との出会い、これが一番の収穫。うまくまとまったかな。





## 【渡辺雄一郎】

私が冒険学校に初めて参加したのは 1993 年で、当時私は小学校 6 年生でした。その年は参加者として、また翌年からはジュニアリーダーとして冒険学校の村コースと山コースに参加させていただきました。全日程を通して正式に参加したのは高校 1 年の山コースが最後であり、現在すでに 7 年以上が経過しています。もうほとんどのことは忘れてしまっているかと思いましたが、押し入れの奥から発掘した「冒険のしおり」を読んでもみると、当時の記憶が断片的にはありますが次から次へと蘇ってきました。

まず、村コースは入り口に大きな吊り橋が架かっている中津川村キャンプ場を拠点にして活動します。今となってはなぜ自分が村コースを希望したのかは忘れてしまいましたが、やはりその活動内容の多様さに魅力を感じたのでしょう。さまざまなイベントに参加したことを今でも覚えています。



その数あるイベントの中でも鍾乳洞の探検は特に面白いものでした。長袖・長ズボンと軍手、ヘルメット、ヘッドライト着用の本格的な装備で鍾乳洞のかなり奥のほうまで行きました。観光地となっているような大規模な鍾乳洞と違い、基本的に一人一人が通れるくらいの大きさで、途中では身を屈めないと通れないような所もありました。中津川周辺は夏でも涼しいですが鍾乳洞の中は特に涼しく、またその内部の狭さもあいまって幼心ながら「もし今地震が起こったら岩盤が崩落して

ここに閉じ込められるのだろうか」とくだらない心配をしたものです。



また、川遊びも非常に面白かったと記憶しています。川底が滑らかで滑りやすくなっている所で滑り台のようにして滑ったり、滝のある所でロープにぶら下がり下りの池に落ちないように耐えたり、川が補修されている所で飛び込みをやったりしました。少々時期がずれますがあれは高校 1 年の時だったでしょうか。自分は着替えずに、ほかの飛び込もうとしている人たちを後ろから押して遊んでいたところ、ついに捕らえられ四肢をそれぞれ掴まれ、服を着たまま川に放り投げられてしまいました。

ほかにも、夜に川原で寝たときに非常にきれいな星空を見れたこと、その次の日に雨が降り川が増水して寝ていた場所が激流に飲み込まれてしまったこと、炭焼きの作業を体験したときに顔と鼻水が真っ黒になっていたことなど、たくさんのことをまだ覚えています。

次に、山コースは高校 1 年の時に参加したのが最初で最後でしたが、やはり現在に最も近い印象に強く残っています。山コースでは甲武信岳を目指してただひたすら山を歩きます。さらにスタッフはテントなどの器材も含めた荷物を背負うので、しっかりと準備を整えないとなりません。さすがにこの頃になると、まだまだスタッフの方々や小学生の参加者から見ると至らない点は多かったと思いますが、多少は自分なりにジュニアリーダーひいてはスタッフとしての自覚を持っ

て参加していたと記憶しています。

重い荷物を背負って片道 2 日間かけて登山するので、登り始めた頃は元気がよくても次第に疲れが溜まって辛くなるのですが、参加者を励ましながら地面や岩にびっしりとコケがむしている美しい登山道を歩きました。そしてやっとの思いで辿り着いた山頂から見渡せる風景はそんな疲れを一気に吹き飛ばしてしまうほどのすばらしさでした。また、苦労して山に登ったあとの山小屋のカレーや源流の水もまた格別なものでした。2000m 級の山に登ったことはこれが初めてであり、甲武信岳周辺の地図を見るたびに普段気軽に登ることのできないすごい山に登ったと今でも驚いてしまいます。また、山コースでは自然のすばらしさを実感するとともに、文明のありがたさも実感しました。いったん山に入ってしまうと、疲れたからといって車に乗ることもできませんし、夜になればあたりは一面真っ暗で寝るしかありません。普段何気なく生活しているこの環境がいかに便利で快適になっているかを身にしみて感じました。



こうして当時を振り返ってみると、自然の中で過ごした日々やそこで得た経験、そして人脈は自分の人格形成に大きな影響を及ぼし、今では本当に貴重な財産となりました。私は冒険学校によって非常に多くのものを得ることができました。冒険学校に関わったすべての人に感謝しつつ筆を置きたいと思います。ありがとうございました。

## 【宮村連理(現・東海大望星高校教諭)】

### ～冒険学校のあゆみによせて

先日、街を歩いていると、自然文化誌研の重鎮から電話があり、冒険学校のあゆみを発行するから原稿を書かないかと誘われた。誰も書かなかったら書きますとか、もっと紆余曲折した人生(冒険学校の OB はみんなそうだ)を送っている OB の方が面白い原稿を書けますよとか、法人化してから一回も会費を払っていないことなどを理由に断ろうとしたものの、自然文化誌研の特有の間合いというか、呼

吸というか、受けざるを得ない状況になった。しかし、この間合いこそが自然文化誌研の、冒険学校の魅力なのである。他の OB の方の原稿の多くがおそらく冒険学校はこんなに素晴らしく楽しい、というものであるだろうから、すこし違った視点で冒険学校の魅力、思いをよせてみたいと思う。

冒険学校に初めて参加したとき、まだ小学生だったが、その時は、環境はおろか、自然にもさほど興味がなかったのをよく覚えている。ただ連れてこられて参加していたのをよく覚えている。まんまと親にだまされて毎回参加していたのだ。まだ冒険学校が武蔵五日市で行なわれていた頃だ。今でこそ、冒険学校の目的や意味を理解しているつもりだが、当時の思い出と言えば、化石を掘りに行った途中であの幼女連続誘拐殺人を行なった宮崎勤の実家の前を歩いたことだ。

そんなわけで大人が期待するような思い出もないまま(そんなことはない、きっと当時は夢中だったはず)、中学生になり、高校生になり、それでも自然文化誌研の主催するイベントに参加し続けていた。そして、大学生になり、大学院生(しかも学芸大の)になってスタッフとして参加するようになっていた。スタッフとして私は何をしていたかというと、何もしていなかったのである。何かをしに行くのではなく、何もしないことをしに行っているかのような感覚だった。現在では、スローライフとかいう



怪しい言葉でくられているが、当時はまだ怠け者程度にしか思われなかった(事実、怠けていた)。しかし、こういう人間を受け入れてくれることが、何度も、何年も通いつけている理由なのだ。例えば、冒険学校で大滝村に行ったとする。スタッフのみなさまは、食事に宿泊、クルマの手配に飛びまわっている。何年も来ているスタッフも初めて来た大学生も飛びまわっている。ところが私は、河原で昼寝をこいていたのだ。普通なら、帰ってください、来年からは結構です、役立たず、人間のクズなどと言われるが、なぜか言われず(多少は言われた)、ぼちぼち作業を手伝えればよかったのである。こうみていくと私は本当にダメ人間のようなのだが、それでも一人の人間の価値を認めてもらえたような感じが、自分にとっては居心地がよく参加し続けた理由なのかもしれない。

その後、環境問題や環境教育に興味をもつようになり、いまでは、とある大学の付属高校で働いている。その学校は、不登校児など様々な理由で普通の学校には通えない子たちが集まってくる学校である。彼らと話をするうえでまず大事なことは、彼ら自身の価値を認めることであった。決して否定はしない。いわゆるドロップアウトした彼らは自分自身に価値がないと思っているからだ。冒険学校のスタッフとして「ドロップアウト」していた私は彼らの気持ちがよくわかるのである。否定されれば居場所がなくなるだけで、人は変わらない。まさか冒険学校での経験がこんなところで生かされるとは思ってもみなかったのである。



私の担当教科は理科でも、専門は環境教育である。ゴミ処分場見学から森林保護のボランティアまで経験させ、自分なりの理解、自分なりの把握をさせるようにしている。しかし、森に行こうぜ、など行っていく生徒は皆無である。テレビやゲーム、携帯電話で遊んでいた方が楽しくて楽に決まっている。渋谷にたむろしていそうなコギャル(死語)が森に行くわけがない。しかし、実際は楽しそうに参加している。どうやってそんな彼らを連れて行くのか。答えは簡単だ。だまして連れて行くのだ。授業の一環だ、単位がもらえる、などである。行ってしまうと、テレビやゲームなどよりも、自然の方が楽しいに決まっている。学校で悶々としている彼らが森ではしゃいでいる姿ほど心強いものはない。季節によって、天候によって違う顔を見せる自然の方が飽きないのだ。そんな活動を通して、何が問題で、自分とどう関わっていて、いま何をしなければならないのか。教えるのではなく、自ら気づくように状況や環境を整える。自ら学ぶ。これは、環境教育ではあたりまえだが、それが実は教育とは何か、といった一番の基本なのではないだろうか。

そう考えていくと、これらの私の教育に対する考え方、大げさに言えば哲学は、冒険学校によって培われてきたといっても過言ではない。自然との関わり、自ら考える姿勢、個性、というよりも一人の人間を尊重する考え方、だまして連れて行く手法などである。大学院のときの家庭科の有名な先生が、なぜ今の人は自然を大事にしないのか。幼児期に自然体験をしていないからだ、とおっしゃっていた。まさに自分は若かりし頃に冒険学校という、中高生ではとても把握ができないような自然と格闘していた。その経験がいまの自分を作っているのだ。冒険学校はそのパイオニア精神や環境教育といった側面で語られることが多い。それを否定はしない。しかし、自分にとって、参加者にとっての冒険学校とは何か、と問われれば、自分の生き方を決めたものであったのだと今は思っている。



### 【満川尚美】

大滝での最後の冒険学校に参加した満川尚美です。村コースでもっぱら、給食のおばさんをしてみんなにまずいものを食べさせていました。すいません。

個人的感想としては、まずは、楽しかったです。人生で初めてケービングというものをやりました。最初にして最後の体験になりそうです。

心に残ることは、「自然との付き合い方を子どもに教える時に、何をどう遊ぶか自己決定させる。そうしなければ、自然のなかで活動する楽しさを体得できないのだ。」とスタッフが繰り返して言い、その態度を貫いていたことです。自然環境と人間がどう出会いどう付き合っていくのか、自然活動の好きな子どもをどう育てるのか、深く教えられた気がします。

のんびり、ゆっくり。大滝・中津川での「時」は、その活動の仕方を実践すべく実に優雅に過ぎていきました。今、学校教育のなかで実施されている林間学校や移動教室との違いを、思わないわけには、いきません。自然と付き合うのは、贅沢なことなのだ、とも思いました。



▲ 鍾乳洞探検



▲ うどんづくり

## 【鈴木英雄】～環境教育との出会い

冒険学校は環境教育だという。環境教育ってなに。教育からアプローチしようとしたが、教育学も心理学も学んでいない私にとって、教育とは国語・算数・理科・社会でしかない。四当五落の生き残りでもある。教育とは受験のため以外の何者でもない。では、得意分野の環境を考えてみた。環境とくれば、大気汚染、水質汚染、地質汚染である。レベルが高すぎて、そんなものを子供たちに教えられるか。

「環境教育ってなに？」、は何年も夫婦間で議論続けてきたけれど、あまり考えすぎるのも良くない。冒険学校の一週間は楽しいし、中津川はいいところだし、要するにプロの背中を見せればいいってことじゃねえか。勝手な解釈ではあるが、プロとしてまず、かっこからびしっと決めることにした。でかい靴を履いて、長い靴下を履いて、長袖長ズボンの作業服、腰にはチャンピオンベルト、いや、岩石ハンマーをぶら下げて、首にはループがぶら下がっている。よく見ておけ、これが地質屋の正装だ。山道を歩くときは当然先頭だ。俺の前を歩くんじゃねえ。いいか、おめえたち、これがグリーンガーネットよ。直径 2cm で 40 万円とも言われている。俺はこの石をひたすら探す。おめえたちの面倒は見ない。ここは急な斜面でちょっとばかしあぶねえが、自分の身は自分で守れ、わかったな、よし、かかれ。

ホントにこれが環境教育か。砂金探しにも行っ  
たし、黄鉄鉱や磁鉄鉱などの鉱石も取りに出か  
けた。ヘルメットをかぶり、ヘッドライトを点けて鍾  
乳洞にもはいった。こんなことが環境教育なのか。  
自分が楽しんでいるだけなのではないか、謎は  
深まるばかりである。自分が楽しんで何かに打ち  
込んでいる姿を見せることが、子供たちにとって  
大切なことなのだ、という悪魔のささやきが聞こ  
える。振り返ると美穂であった。彼女もまた脳天  
気なやつであった。キャンプ場で時に草木染めを  
やったけれど、自分の興味があることしかなか  
った。裏山を歩き回り、草木やキノコを観察し、料

理をし、ひたすらおしゃべりをしていた。

なにもわからないまま、中津川での冒険学校  
は終了した。冒険学校の目的も位置づけも達成  
すべき目標も全く理解できていないのに、キャン  
プ場では年齢が相対的に上だということで、結構  
えらそうにしていた。この場をお借りして・・・もう  
遅い。自然界の森羅万象には精通していたが、  
環境教育については今でも真実が見いだせない。  
環境教育との出会いは唐突に、そして別れも突  
然訪れる。

冒険学校は終了した。美穂も死んだ。いつも  
私たちは違うことをしよう、お互いの活動範囲が  
重ならないようにしようと話してきた。その私た  
ちが冒険学校では同時に存在していた。家族で同  
じ場所、同じ時間を共有する貴重な場であった。  
今、その全ては思い出となった。



砂金探し

## 5. 冒険学校の参加者および保護者の声

冒険学校の参加者やその保護者にアンケート調査を実施したものを井村や中込および黒沢（3名とも NPO 法人自然文化誌研究会会員）が「農山村における自然・生活体験活動に関する調査」としてまとめました。ここではその調査結果の概要をアンケートにしぼって抜粋し、掲載します。アンケートへのご協力してくださった方々に深く感謝いたします。

以下抜粋

### 農山村における自然・生活体験活動に関する調査

井村 礼恵（東京農工大学大学院）

中込 貴芳・黒澤 友彦（NPO 法人自然文化誌研究会）

自然文化誌研究会では、1988 年からの冒険学校の参加者およびその保護者に対して、2003 年に追跡調査を行った。対象者は現在住所が判明している参加者とその保護者とし、郵送で質問紙を配布、回収した。質問紙の回収率は、参加者が約 18%（56/318）、保護者が約 15%（48/318）である。聞き取りによる補足調査も行った。質問紙では、参加者に対してはプログラム自体に関すること（冒険学校での印象に残っていること・知り合った参加者との交流・フィールドへの関心・フィールドの住民との交流等）、参加者自身の現在に関すること（自然の中での活動及び意識・今後の冒険学校へのかかわり方等）について、保護者には参加後の子どもの変化、冒険学校への評価等について質問項目を設けた。

#### 追跡調査の結果

##### 参加者からの回答結果（全 56 回答）

##### Q1-①.冒険学校に参加しておもしろかった活動はなんですか？

上位のみを挙げると、川遊び（49 回答）、鍾乳洞探検（21 回答）、小集団行動（19 回答）、焚き火（19 回答）、ナイトハイク（16 回答）、鉱石探し（14 回答）、沢登り（12 回答）、登山（12 回答）、ドラム缶風呂（11 回答）、木工（11 回答）の順だった。

1988 年に行った『参加 1 ヶ月後の参加者の意識変化調査の結果』では、参加して印象に残ったことという設問の回答の上位は「川遊び」、「紙すき」、「鍾乳洞探検」、「テント設営」と続く。この結果と比較してみると、体験後 3 年～12 年の年月が経っても、参加者にとって深く印象づいているのは日常生活の中では体験しにくい活動であった。

##### Q1-③.冒険学校で知り合った子どもと今でもお付き合いはありますか？

「はい」15 回答、「いいえ」41 回答。「はい」と答えた参加者は、1 回のみの参加ではなく、その後も 2 ～3 回継続参加した人がほとんどだった。

##### Q1-④-1.今でも大滝村や五日市町に行ってみたいですか？

「はい」53 回答、「いいえ」3 回答。「はい」が圧倒的に多く、1 週間活動を行った場所に対し愛着が生まれていると推測できる。「いいえ」と回答した内 2 名は、活動の思い出として、友達や大人との出会いなど人との交流が印象に残っていると答えており、場よりも場にいた人に対しての印象が強かったもの



と考えられる。

Q1－④－2.冒険学校にきた村の人の中で、今も覚えている人はいますか？

「はい」31 回答、「いいえ」25 回答。「はい」という回答には、「顔だけ覚えている」というコメントが添えられていたり、村民ではなく地元外スタッフの名が挙げられていたものも数件あった。参加者にとって、活動に関わった大人が地元の人かそうでないかという選別は、特に記憶の中には残りにくいと推測される。

Q1－④－3.村の人との手紙のやり取りや、実際に会いに行ったりすることはありますか。

「はい」5 回答、「いいえ」49 回答、無記入 2。

Q2－①.現在のあなたは自然の中で活動することをどう思いますか？

「大好き」30 回答、「好き」20 回答、「普通」5 回答。ほぼ全員が好意的な回答をしている。「嫌い」が 1 回答あり、その参加者に関しては、保護者アンケートによると、冒険学校を経ての子どもの変化として、「自然に対し、関心が高くなったように思う。ハイキングなどに行くと親に知っている事を教えてくれる。」と回答しているため、参加者の回答の意図が不明である。

Q2－②③.現在、自然についての趣味や自然に関わる活動をしていますか？

「いいえ」40 回答。「はい」は 16 回答で、具体的には登山やキャンプ、バードウォッチング、ダイビング、釣りなど、多方面にわたる。

設問2－①で、自然が「大好き」「好き」「普通」と好意的な回答をほぼ全員がしていることに対して、実際の活動や趣味などの行動が伴っている人は少ないのが現状である。

Q2－④.冒険学校はあなたにどんな影響を与えましたか？

「自然が好きになった」30 回答、「自然についていろんなことを知った」24 回答、「五日市町・大滝村が好きになった」20 回答、「友達が増えた」19 回答、「得意なものが増えた」11 回答で上位にあがった。また、「五日市町・大滝村が好きになった」と答えた全員が設問1－④で、五日市町・大滝村に今でも行ってみたいと答えている。

設問2－②で、「現在、自然に関わる趣味や活動をしている」と答えた人の 16 人中 15 人が「自然が好きになった」もしくは、「自然についていろんなことを知った」と回答している。

一方、「活動等をしていない」と答えた人の多くが、「大滝村を好きになった」、「友達が増えた」「得意なものが増えた」と回答しており、その他の記入欄にも「いろいろな意味で強くなった」「自信がついた」「料理やその他の作り方がわかった」「自分のことは自分で決めるという価値観」「たくましくなれた」「根性がついた」「まわりとの交流・調和の仕方を学んだ」など、体験が自分自身の内面や人間関係に影響を与えたことを挙げている。

このことは、冒険学校の基本的な考え方のひとつである『プログラム選択の自由を可能な限り拡大する』ことの意義を示しているように考えられる。

Q2－⑤.将来、あなたに子どもができれば、参加させたいと思いますか？

「はい」51 回答、「いいえ」3 回答、無記入 2。この「いいえ」と回答した参加者は、現在まだ小中校生であるため現実味がないためと推測される。

#### Q2ー⑥.将来冒険学校のスタッフのなりたいと思いますか？

「はい」30 回答、「いいえ」17 回答、無記入 9。「いいえ」の回答をした参加者の他の設問への回答を見ると、冒険学校の活動に肯定な回答が多い。そのため、活動への評価と自分自身がスタッフになることは、影響しあうとは限らないようだ。

#### 保護者からの回答結果(全 48 回答)

##### Q1.冒険学校を経て子どもに何らかの変化はありましたか？

「自然と遊ぶ楽しさを知った・興味が広がった」10 回答、「良い影響があったと思う」8 回答、「判断力・周囲への配慮・自信がついた」6 回答、「自分で考えて、自分で決めるようになった」4 回答、「受容範囲が広がった」4 回答、「自立心が旺盛になった」4 回答、「大勢の友達と遊ぶことを好むようになった」4 回答等。

##### Q2ー0.冒険学校のような自然体験キャンプに、今後も参加させたいと思いますか？

「ぜひ参加させたい」14 回答、「本人が望めば参加させたい」28 回答、「特に参加させたいとは思わない」5 回答、「参加させたくない」1 回答。

##### Q2ー①.今後どのような自然体験の活動を期待しますか？

「自然の中での活動」8 回答、「静けさ、星、暗闇、風、恐ろしさなどの原体験」6 回答、「今までの冒険学校のあり方のまま」5 回答、「家では普段できないこと」5 回答、「ワイルドなもの・サバイバル能力」5 回答、「その土地の人との交流」2 回答、「親なしの子ども達多勢集団行動」2 回答、「環境保持への貢献」2 回答などが挙げられている。

保護者の活動への期待内容は、主催者側の冒険学校の基本的考え方や目指していることと重なり、活動前の保護者説明会で保護者の理解が得られていることを裏付ける。

##### Q2ー②.今後、参加させたくない理由について

「特に参加させたいとは思わない」と回答した全員が「子どもに時間が取れそうにない」ことを理由にあげた。また、初期の頃に参加したケースが多く、子どもの年齢が高くなってきているのでと断りがあったものが多かった。

「参加させたくない」と回答した 1 名は、「生活時間が守られていなかったようなので」と理由をあげている。主催者側の意図としては、生活時間が守られていないというのは、就寝と朝食の促しはするが、あえて寝る時間も起きる時間も子どもの自主性に任せているためである。3 分の 1 ほどの参加者が夜更かしをするが、参加者本人には夜更かしの目的があり、普段は体験できない深夜の闇や、月明かりの下での語らいも参加者にとっては良い体験になるという主催者側の意図がある。

##### Q3.開催する土地の文化に触れる活動をどう思うか。

「とても良い・勉強になる・貴重な体験」36 回答、「家庭では難しい」5 回答等が挙げられていた。回答の

内容はほぼ肯定的であった。

### 追跡調査結果の考察

体験活動に対する参加者の興味や影響は各個人ごとに多方面に分散していた。1 週間という長期プログラムの中で、参加者の主体性を重んじスタッフがこの興味を引き出しつなげる援助をしたことは、自然や地域、他者に対する参加者の認識を育てることとなり、参加者自身の生活や生き方との関わりを見出すきっかけとなったと考えられる。ひとつの場と時間が参加者に与える影響の可能性を狭めないことを念頭においた活動によって、より広がりを持たせることができたと言えよう。

また、自然・生活体験で模擬的に小域社会（小集団）をつくり活動する中で、その活動フィールドである中域社会との関係を持つことは、広域社会とのつながりを見出す促しへと発展できたと考えられる。

冒険学校のひとつの目標である「地域の自然・文化遺産を継承するナチュラリストのジュニアリーダーを育成する」ことに関しては達成できたかを、この調査結果だけから判断することは難しい。1 週間の活動の中だけで、参加者の今の姿があるともいえない。しかし、参加者の 51 名が自分の子どもにも同じ体験をさせたいと回答していることは、地域の自然・文化遺産を継承することに対する賛同の意があると言える。

また、主催者側としては活動に参加した影響が目に見えて現れることは期待していなかったが、保護者の目から見たときに、「子どもに自信がついた」などの多数の変化があったことは興味深い。参加者自身の興味を引き出し、その後の思想や行動に影響を与えたことは間違いない。

子どもが変わることで、保護者の体験活動への理解が深まったことも評価できるだろう。多くの保護者は記述式の回答欄にもぎっしりと記入をしており、関心の高さをうかがわせた。

### 自然・生活体験活動評価の視点

冒険学校の各参加者は、体験当時の参加姿勢や印象では計れない影響をそれぞれが受けている。ひとつのフィールドで行う活動は、子ども達の自主性を重んじることにより、自然・生活体験へと各自の興味によって広がりを見せ、体験後個々人の中で、より複合的な学習へと発展している。冒険学校で影響を受けたことは、自然に対する意識のみならず、自己の内面や対人関係に対する意識にも及んだと参加者自身が感じている。自然・生活体験は、参加者自身を大きく変化させる可能性を持っている。

ほとんどの参加者が活動フィールドに対する愛着を持ったことは、農山村エコミュージアムの視点からも評価できる。地域振興と教育活動の相乗効果が見込まれるだろう。1 週間という短期間であっても、そこに身を置き各自が自ら何をしようかと考え、体験を行った成果だといえる。また、活動フィールドの特性や自然と生活文化の関わりを伝えたことが、参加者が自分の地域に戻った時に、自分の地域の特性や関係性、自己存在の位置を考える機会にもつながると考えられる。

スタッフは地域フィールドの特性を踏まえた受け皿をより一層深めていくことが必要である。これらの実践を試みるためには、体験活動の実践可能領域を限定提示しないプログラムづくりとそれに応じられるスタッフ養成、地元の人を含む様々な専門家を巻き込むことが重要である。



## 6. 冒険学校の活動プログラム

冒険学校では多種多彩で様々な活動を行ってきました。特に、冒険学校の開催回数が一番多い埼玉県大滝村では、地元の自然や文化に即した多くのプログラムが生まれました。大滝村のものを中心に、冒険学校の代表的なプログラムを以前まとめたものをここに掲載します。読者の皆様がこのプログラムを実施する場合の参考になればと思います。

### 野外活動Ⅰ ナイトハイク

夜の暗い山道を散策する活動です。なるべく懐中電灯をつけずにいると次第に目が慣れてきて、月明かりだけでも充分明るく歩けることがわかります。子どもは怖がって懐中電灯をなかなか消しません…。どこからともなく不思議な鳴き声が聞こえたり、ガサガサと草むらが揺れたりして、ちょっぴり怖いけど、みんなで歩けば大丈夫。思いもよらずムササビやタヌキに出会えるかもしれません。途中でネイチャーゲームなどを取り入れたり、広場にみんなで寝ころんで星を眺めてみることもできます。夜の山はシーンと静かで何も見えないようで、いろんな発見がありとっても神秘的です。

- (1) 季節 春～秋
- (2) 場所 埼玉県大滝村中津川キャンプ場周辺
- (3) 対象者 小学校～一般
- (4) 所要時間 1～3時間
- (5) 必要な装備 懐中電灯、長袖長ズボン、救急セット
- (6) 実施の方法
  - ①持ち物の確認と注意事項の説明:お風呂に入りたてで湯冷めしそうな子はいないかな？。
  - ②さあ出発だ:最初は怖いから懐中電灯をつけたままで行ってみよう。
  - ③休憩:広場でねころがり星の観察。電灯をつけずに星を観察します。だんだん目が暗闇になれてきます。
  - ④再び出発:もう懐中電灯なんていらないね。
  - ⑤終了:転んだりケガをした子はいないかな。身体が冷えているので早めに布団に入ろう。
- (7) 注意事項 事前にハイキングコースをしっかりと下見しておきましょう。山村のおじいちゃんやおばあちゃん達は午後9時頃にはもう布団に入ります。山の谷間などは良く声が響くので、大騒ぎしないように気を付けましょう。目が慣れてきたからと行って山道をはしゃいで走り回ったりすると事故のもとです。

### 野外活動Ⅱ 沢のぼり

沢のぼりは、河川と小さな支流が多い日本の独特の野外活動です。水の中をジャブジャブと歩き、壁面に張り付いて移動したり、滝を登ったり、時には泳いだり、とってもダイナミックな活動です。とても越えられそうもない滝でも思い切って水の流れの中に入ってルートを探していくと、手の引っかかる場所があって、なんとかよじ登れるものです。びしょびしょになりながらも目的地に着いたときの爽快感は格別です。水中の石はコケや藻がついているのでつるつる滑ります。転落する危険性のある場所もあり

ますから、ザイルなどを使った確保の技術も必要です。非常に危険が伴う活動でもあるので、リーダーは事前に装備のチェックや下見など、十分に準備をしてから始めましょう。滑り止めのために足周りは地下足袋に藁草履を履くのが一般的ですが、最近は沢登用の靴も売っています。

- (1) 季節 夏
- (2) 場所 埼玉県大滝村大滑沢、大若沢周辺
- (3) 対象者 中学生～一般
- (4) 時間 3～5時間
- (5) 必要な装備 確保の道具、地図、ヘルメット、救急セット、地下足袋、藁草履、トランシーバー、長袖長ズボン、着替え
- (6) 実施の方法
  - ①参加者集合：健康状態と装備のチェック。ヘルメット・胴綱の確認
  - ②活動開始：個々のペースを良く把握して、ゆっくり急がずに登らせる。
  - ③確保地点：確保スタッフとよく連携して、参加者に指示を出す。決して無理をさせない。
  - ④休憩：必要がある場合は随時休憩をとる。
  - ⑤目的地到着：ケガなどの確認。濡れた衣服を着替えて、身体を暖める。
  - ⑥解散場所に移動：参加者は疲れているので最後まで気を抜かない。
  - ⑦解散：健康状態のチェック。装備の返却と反省会。解散
- (7) 注意事項 グループは参加者が3～5人で指導者が前後につきます。確保が必要な場所がある場合、確保スタッフは先に移動して確保の準備をして待機しておきます。活動後は濡れていて冷えるので、すぐに着替えてたき火や温かい飲み物で身体を暖めたらよいでしょう。事前の参加者の健康状態チェックから、疲れている身体で下りてくるまでが沢のぼりの活動ですから、最後まで気を抜かないようにしましょう。

## **野外活動Ⅲ 源流探検**

「今、この目の前に流れている川の水はどこからきたのだろうか？」という疑問に、ストレートに答えを見つける活動です。山からどのように水が出てくるのか。川の始りがどうなっているのか、そこに行き着くまでの川の変化や周りの自然環境を体験しながら探してみます。源流に到着したら、その水をくみ、持って帰ってみんなに味わってもらいましょう。いろんな場所で、水の味比べをしてもおもしろいです。途中、滝に行く手を遮られたり、急斜面の尾根を越えることになったり、技術的にも野外活動としては、沢のぼりに似てかなり高度な活動です。また、天候や気象条件に対応したり、子どもたちの様子もよく注意するなど、リーダーのその場に応じた的確な判断力が要求されます。

- (1) 季節 夏
- (2) 場所 埼玉県大滝村大河俣小屋周辺
- (3) 対象者 小学生高学年～
- (4) 時間 3～6時間
- (5) 必要な装備 確保の道具、地図、ヘルメット、救急セット、地下足袋、藁草履、トランシーバー、長袖長ズボン、着替え
- (6) 実施の方法

①子供たちの希望を事前に聞いておき、どの沢を歩くかあらかじめ計画しておく。できるだけ小さな川から始めた方がやりやすい。良いところにベースキャンプを張り、ピストン移動する。

②ヘルメット、地下足袋、わらじをつけて、ベースキャンプを出発。スタッフは、ザイル、胴綱などの装備を持っていく。源流の水を持って帰る水筒もわすれないように。

③川沿いや川の中を歩きながら、歩きやすいルートを皆で相談しながら登っていく。源流はどんな所か話し合いながら登ると、盛り上がる。

④源流らしき？場所についたら、水を味わってみる。おみやげに水を持って帰る。

【源流タイプ】 雫がたくさん集って川へ流れている。

湧き水を見つける。

山からいきなり水が出ている。

源流までたどり着けないことは多々あるので、記念に石を持って帰ったり、別の機会に甲武信岳の荒川や千曲川、笛吹川の源流を見る山登りも行なっている。

#### (7) 安全及び注意事項

沢登りのしっかりとした技術を持ったスタッフが必要。参加者の力量などを見て、歩行が困難になってきたら、引き返すかどうか判断する。

## 野外活動Ⅳ 川遊び

川遊びは子どもたちが大好きなプログラムです。暑い夏の日差しを受けてザブンと川に飛び込む気持ちの良さは格別です。日頃からプールでしか泳いだことのない子どもには、流れがあり虫や魚がいて変化に富み、新鮮なのでしょう。その反面、急に流れが速く深くなっていたり、渦が巻いていたり、川底にガラスや瓶が割れていたりして危険なところでもあります。活動の際には十分注意する必要があります。子どもたちはこの川遊びの中で、いろんな遊びを作り出します。言い換えれば、川遊びはいろんなプログラムの母胎となりうるものです。ここでは川遊びから発展できるプログラムを紹介します。





## 【1】イカダ作り

林業間伐体験のプログラムででた除間伐材や倒木等を活用して、いかだを作ります。完成したイカダをそろりそろりと川の中に入れる進水式は、大人でも童心にもどり喜々とするほど感動があります。

- (1) 季節 夏
- (2) 場所 埼玉県大滝村 流れがそんなに早くない水の溜まったところ
- (3) 対象者 小学生～
- (4) 時間 2時間～3時間
- (5) 必要な装備・材料 ロープ、カスガイ、ナイフ、ノコギリ、カナヅチ、バール  
乾燥させた木材2～3m×5～7本(直径による)\*生木の皮をはいで使う場合、  
よく2～3週間乾燥させた方が、浮力が得られます。

### (6)実施の方法

#### ①組み立ての方法

木と木の間にロープをクロスさせて1本ずつ固定していく方法が一般的ですが、基本的にやり方は自由です。しっかり固定できればそれでよいのです。ロープを巻き終わったらカスガイで補強して完成です。合板を上にしき、固定するとイカダがより安定します。

#### ②後かたづけ

遊び終わったら、そのまま放置しておくわけには行きません。解体して持って帰るか、木工作やすみか作りなどの材料として再利用しますが、冒険学校ではみんなで運んで、小さな林道の橋にしました。

### (7)安全及び注意事項

この様な活動を行なう場合、リーダーが安全のためについていることは大事なことなのですが、「そこはそうじゃない」「こうした方が頑丈だ」と、ついつい手を出しすぎて、結局リーダーが作ってしまったりすることが多いようです。少しぐらい下手でも、不安定でも、子どもたち自身の手で試行錯誤し工夫し何度も失敗したほうが、成功した時の喜びも大きく、楽しい充実した活動になります。

## 【2】ブツテを使った魚取り

大滝村の昔から漁具であるブツテを使って魚取りをします。昔から伝わっている漁法で、特に、大雨で川が増水したときに行われました。イワナやヤマメよりも主にカジカをねらった漁法です。大きなちりとりのようなブツテの中に魚を追い込む漁法ですが、やり方は簡単で子どもから大人まで楽しめます。ブツテを作るところから始めると、子どもには難しく時間もかかるので、あらかじめ作っておくのが得策でしょう。

本会はカジカを食べるために捕っているではありません。この活動は、中津川地区にいなくなった「カジカを戻す会」の一環として開催しています。ダムに沈む滝沢地区に残るカジカをブツテで捕り、上流の中津川地区に放流しています。

- (1) 季節 春～秋
- (2) 場所 大滝村の河川、滝沢～塩沢周辺
- (3) 対象 小学高学年

(4) 時間 3～5時間

(5) 必要な装備・道具 ブツテ、バケツ、酸素ボンベ、服の着替え、救急セット



(6) 実施の方法(漁の方法)

ブツテ漁の方法としてもっともポピュラーなものは、1人で行なう方法です。雨の後など水の濁った川辺の、草の根や石の中に隠れている魚を狙います。利腕でブツテの柄を持ち、片方の手や足で石を動かし、カジカをブツテに追込みます。人数がいる場合は追い手(カジカを追込む人:数名)とブツテ(ブツテを構える人:ブツテの数)に分れます。ブツテはカジカが下流に逃げないように浅瀬にブツテを並べ、ブツテの数が少ない場合は、石と石の間の、水が集り落込んでいるような場所にブツテを構えます。追い手は川岸を魚を驚かさないように静かに登り、配置に付きブツテの合図を待ちます。合図があったら、追い手は竹ぼうきで川底を掃いたり、水面をたたいたり石をひっくり返したりしながら、ブツテの方まで追込んでいきます。ブツテはいつ魚が入っても引上げられるように注意深くブツテの中を凝視しながら待ちます。魚が入ったらすぐにブツテを引上げて魚を取りだし、次に備えます。このような流れを上流へ登りながら繰り返します。

ブツテを構えていると、魚以外に落ち葉や木端が入ってきて、なかなか素人にはわかりづらいですが、コツがあります。落ち葉などが水の流れと同じようにブツテに入ってくるのにくらべ、魚は流れより少し速かったり、曲ったりするところに注意して、構えることです。

(8) 注意事項 基本的に日本の河川では釣り以外のブツテを使った漁法などは禁止されています。本会は水資源開発公団と大滝村漁業組合の協力と了承をいただいて活動しています。



## 野外活動Ⅴ 鍾乳洞探検

子どもには大人気の活動で、暗くひんやりした洞窟に懐中電灯を持って探検します。人が立って歩けるような所なら楽なのですが、自然はそんなに親切ではありません。屈んで歩いたり、腹這いになって進んだり、ドロコに汚れることも覚悟しなければいけません。また、縦穴の鍾乳洞などではザイルワークの技術も必要です。

- (1) 季節 春～秋
- (2) 場所 埼玉県大滝村 仏石山鍾乳洞 赤沢鍾乳洞
- (3) 対象者 小学生～一般
- (4) 時間 2時間～3時間
- (5) 必要な装備 長袖長ズボン、着替え、ヘッドランプ(両手が使える物)、換えの電池、確保に必要な物(ザイル、カラビナ、胴綱など)、救急セット
- (6) 実施の方法【仏石山鍾乳洞の紹介】  
コウモリなど洞窟の中に住む生き物も観察できます



### (7) 注意事項

暗闇の中ヘッドランプだけの活動なので、ヘルメットは必ず必要です。また、腹這いになってドロコになるので服装は長袖長ズボン、水にも濡れるので着替えも必要です。リーダーは事前に鍾乳洞内の危険な場所やザイルを使った確保が必要な所を知っていことが大事です。子どもたちは、大人の入れない穴にどんどん入っていかないように注意しましょう。小さい穴に入って事故など起こると助けることができません。洞窟内で電池が切れることがあるので、換えのバッテリーを持っていきましょう。



## 野外活動Ⅵ 小集団行動

少人数で行う野宿で、冒険心をくすぐられる魅力的な活動です。電気もフトンもない、なんにもない森の中で一日生活してみると、森の中は実はいろんなものでみちあふれていることに気づきます。2～3人の参加者に経験豊かなリーダーが1人つく程度の、できるだけ小人数で行動します。小人数の方が動きやすく、また自然との一体感も芽生えやすいからです。経験をつんだ参加者なら非常用以外の食べ物を持っていかに、山菜や魚を取って生活するサバイバル的な活動にすることも可能です。

- |           |                                                  |
|-----------|--------------------------------------------------|
| (1) 季節    | 夏                                                |
| (2) 場所    | 埼玉県大滝村大河俣<br>周辺                                  |
| (3) 対象者   | 小学～一般                                            |
| (4) 時間    | 1泊2日程度                                           |
| (5) 必要な装備 | ナイフ、ライター、水筒、雨具、ちり紙、マット、ちょっとした食料、(寒ければ寝ブクロ)、救急セット |



### (6) 実施の方法

#### ①野宿の場所

まずは寝る場所を探すことが第一です。河原のそばは水がすぐ手に入るけど、石がゴツゴツだし、朝方冷えこんで風邪をひくかもしれません。山の尾根の上は星がいっぱい見えるけど、風が強くふいたり、水場から遠かったり。雨がふってきても濡れないような洞窟やほら穴があったら最高です。みんなが一晩お世話になる場所ですから、まわりの環境の条件と寝心地がよい場所を探します。

#### ②トイレ

一晩泊る程度であれば30～40cmの深さの穴を掘っておけば充分だと思います。翌日になったら、しっかり埋めてから移動します。

#### ③焚き火

落ちている枝や、倒木を拾って薪を集めます。焚き火を囲みながら、持ってきた食べ物を枝に刺して焼いて食べたり、楽しく談笑できます。でも森の中ですから大きな焚き火は山火事のもとなのでできません。また火の後始末には十分注意をしましょう。

### (7) 注意事項

活動する場所の山林保有者や地主さんの許可と理解を得た上で、周囲の環境を熟知したスタッフが同行し、安全で楽しい野宿を心掛けましょう。



## 野外活動Ⅶ すみか作り

山で手に入る倒木や枝や落ち葉などを使って自分の家を造ります。子ども自身に形や大きさを考えてもらい、自由に発想してもらいます。しかし一晩そこで寝るのですから、寝心地が良くなければいけませんし、雨が降ってきたときの心配もしなければいけません。落石のある崖の側だったり、雨が降ったらすぐ増水する川辺近くは危険です。そういう点を考慮してリーダーは参加者達にアドバイスしてあげます。協力し合い、みんなで寝られる大きなすみかを作ってもおもしろいですよ。

- (1) 季節 夏
- (2) 場所 埼玉県大滝村大河俣周辺
- (3) 対象者 小学～一般
- (4) 時間 1泊2日
- (5) 必要な装備 カマ、ノコギリ、ナタ、ロープ、懐中電灯、シュラフ、雨具、薬箱、マッチ・ライター、防寒具
- (6) 注意事項 夜はすみかの近くでたき火をするので、場所の設定や火の後始末に注意する。夏でも夜は冷え込み、特に朝方は朝露でシュラフなどはぬれます。防寒には注意しましょう。

## 野外活動Ⅷ 火おこし

子どもたちはたき火が大好きで、一晩中でもたき火の側に火を見つめています。やはり、火には何か不思議な魅力があるのでしょうか。マッチやライターを使えば簡単に点く火も、自分の力で起こそうとすれば大変な作業です。火おこしにはいろんな方法がありますが、子どもたちでも火の点きやすい一番簡単な方法は、マイギリ法がいいようです。それでもかなり慣れることが必要で、火を作る苦労、楽しさが充分実感できます。自分たちのおこした火で、ボーンファイヤーを囲み、焼き芋を焼いたり、楽しく談笑できたら最高です。

- (1) 季節 一年中
- (2) 場所 キャンプファイヤー場
- (3) 対象 小学校高学年～一般
- (4) 所要時間 1～2時間
- (5) 必要な装備・道具 マイギリ法の火おこしセット 木くず
- (6) 実施の方法

### ①マイギリ式の火おこしセット

マイギリ式は、横木、ヒモ、心棒の下にとりつける円形のおもりの板、ヒモそして火きり板を使う。

### ②マイギリ式の仕組み

あらかじめ心棒にロープを巻きつけ、横木が上の状態につりあがっている。そこから、一気に両手で横木を下におろす。すると、巻きついたロープはほどけ心棒は回る。そして、おもりがついているのでそのはずみでまたロープは巻上がる。その時に横木が上がる。上がった横木をさらに一気に下におろす動作を続ける。すると、そのくりかえしで心棒は回転する。

### ③火きり板

火きり板には三角形の切込みと、その三角形の頂点近くに浅いくぼみがついている。くぼみの部分に心棒をあてる。くぼみに心棒をあて回転すると、三角形の切込み部分には黒い固まりがたまっていく。これが火種となるものである。ここからが大切なポイント。てを休めず一気に回していく。ここで心棒を離してしまうと温度が下がり失敗のもと。煙が出てきてもそのまま回転させる。すると、黒い木くずのかたまりがニョロニョロとつながってくる。これが火種で、よくみると内側は赤くなっている。

#### ④火種を炎にする

火種ができれば、カンナくずを用意する。風などで飛ばないように青竹の半分に割ったものを用意した。これはカンナくずがまわりにちらばらず、また風よけにもなり良い。そして、カンナくずの中に火種を勢いよくポンと落とす。その上にカンナくずをかけ、強く息を吹きかける。すると。突然のようにパッと炎が出てくる。

- (7) 注意事項 大人でも、ぶっつけ本番で火は点きません。仕組みを理解し、コツを得た上でないと、子どもに教えることは出来ません。また、子どもはすぐにコロコロと回し火種を作り始めますが、いつ火種ができてもしっかり準備してからでないと労力の無駄です。心棒の先端はとても熱くなっています。火傷をしないように注意しましょう。

## 野外活動区 鉱石探し

大滝村は地質学上では秩父古性層に属し、地質に含まれる鉱石の種類数では世界でも有数だと言われています。私たちが活動の中心としている中津川地区からも鉄、鉛、亜鉛などの原料となる鉱石や金が産出しています。周辺の川辺を歩くと、所々にきらきら光る黄鉄鋼などの鉱石が見つかります。この鉱石探しは、子どもたちには大人気の活動で、ハンマーを片手に、いろんな石を割ってみて、きれいな模様や光る鉱石に狂喜しています。自分で見つけたきれいな鉱石を、ナップサックいっぱい持って帰った子もいました。

- (1) 季節 一年中
- (2) 場所 大滝村中津川地区  
神流川流域
- (3) 対象 小学～一般
- (4) 所要時間  
鉱石採集1時間～3時間
- (5) 必要な装備  
鉱石探しセット(人数分:ハンマー・ルーペ・ゴーグル・サンプル袋)、マグネットペン、救急セット



#### (6)実施の方法

- ①河原に石が落ちているのでたたいてみる。
- ②硬すぎて割れないものは、大人が割ってみる。
- ③表面を見ただけではわからないが、内部はかなり美しい岩石の本当の姿をみることができる。
- ④落ちている石は、結晶質石灰岩(大理石)、石英閃緑岩がほとんどだが、中には鉄のかたまりのような黒い石を発見できる。
- ⑤鉱石は専門家にみてもらい、名前を知る。出現する鉱石は磁鉄鉱(じてっこう)、方鉛鉱(ほうえんこう)、閃亜鉛鉱(せんあえんこう)、黄鉄鉱(おうてっこう)である。

#### (7)注意事項

ハンマーで石を叩くときは、目の保護のために必ずゴーグルを着用させます。

鉱山で採集する場合は事前に鉱山からの許可が必要です。





## 野外活動Ⅹ 砂金探し

中津川周辺では、金の鉱脈があるといわれています。そこで、その金を探し、金の比重が他の鉱物に比べ圧倒的に重いことを知り、鉱物の特徴で、同定や選鉱(よりわかる)ことをやってみます。



- (1) 季節 一年中
- (2) 場所 大滝村中津川地区神流川流域
- (3) 対象 小学～一般
- (4) 所要時間 1時間～3時間(キャンプ場→河原 車で10分)
- (5) 必要な装備  
シャベル:数本  
わん(径20～30cmの比較的平らなもの):人数分  
スポイト:1本  
採集ビン:1本  
ロープ:なるべく多く、救急セット

### (6)実施の方法

- ①わんに砂(川底でも川岸でもどこでもよい)をとる
- ②わんに砂を入れたまま、川の中に静かにしずませる。
- ③川の中でわんをゆっくり、静かにゆらす。そうすると軽いものは川の水の流れで流されるが、金は比重が重いのでわんに残る

## 野外活動ⅩⅠ 昆虫を観察してみよう

木の幹にトラップを仕掛ける訳だが、そこにかかる昆虫がどのような虫なのか、また、どのような餌でよってくるのか、トラップの仕掛け場所によって捕まる昆虫が変わるのかなど、昆虫の生態について興味を持たせる。

プログラムの背景 カブトムシやクワガタなど、最近お金さえ出せばデパートなどで簡単に手には

いるが、実際はどのようなところに生息しているか、また、その他の昆虫も含めて本当に自分の力で採集しそこにいる虫を観察することが最近少なくなっている。

- (1) 季節 夏
- (2) 場所 キャンプ場
- (3) 対象 小学校高学年～一般
- (4) 所要時間 夕方から次の日の早朝にかけて
- (5) 必要な装備・道具 ペットボトル×7本、ティッシュペーパー×1箱、カルピス原液×1瓶、日本酒×1本、ミツカン酢×1本、スズランテープ×一個
- (6) 実施の方法
  - ① まずペットボトルをナイフなどで半分に切る。
  - ② 半分に切った物にスズランテープを木にくくり付けられるような長さに切ってナイフで穴をあけ通す。
  - ③ ティッシュペーパーをつける。ここで雨が降っても水が溜まらないように、下に穴をあけておく。
  - ④ ここでカルピス・酢・酒を、昆虫の好きそうな味を想像させながら、調合する。
  - ⑤ 昆虫が居そうな所(子どもたちに考えさせる)に仕掛ける。
  - ⑥ 夜や早朝虫がかかっているか観察しに行く。
- (7) 発展 木の幹や土の中や川原や色々なところ仕掛けてみると、そこに生息する昆虫が捕まり、楽しい。

参考書など ビーパル8月号

## 文化体験Ⅰ 草花あそび

まつぼっくりの花かご

- (1) 季節 春 秋
- (2) 地域及び場所 どこでも
- (3) 対象者 子供～大人
- (4) 時間 2時間
- (5) 目的

まつぼっくりは、晴雨計。晴れた日は道端でかさをいっぱいに広げてころがっています。雨の日や降った後には、かたくしぼんだまつぼっくりに変身しています。こんな性質を利用した遊びです。こんなちょっとしたことを知ることで、身近なものでもおもしろく観察できるようになります。

(6) 実行の形態

- ① まつぼっくりを拾う。落ちているのは夏が一番多いので、あらかじめ集めとくとよい。
- ② 開いたまつぼっくりに、野の花をはさむ。色合いなどを考えたりしながらたくさんはさんでゆく。
- ③ 花がいっぱいになったら、水の入った容器に30分ぐらい浸しておく。
- ④ 水を吸ったまつぼっくりは、しっかりつぼんで花が抜けなくなり、花籠ができる。

小花たちも水を含んだまつぼっくりに支えられて、しおれることなく生き生きとしている。松葉や藤の葉柄、オオバコの花茎などで把手をつけてさげたれるようにしてもよい。良く乾いたまつぼっくりは、水を含むのに少し時間がかかります。花を途中でさしなおしたりするときれいにできます。

## 文化体験Ⅱ 草木ぞめ

### 1、藍染め(化学建てによる)

#### (1)ねらい

使えるものを染めよう

#### (2)プログラムの背景

中津川にもともとあるものではないが、Tシャツなど、自分で染めて着られるものを作り、昔の畑仕事や山仕事の衣料がほとんど藍染めだった話をする。(虫やまむしよけになったことなど)

#### (3)所要時間

1～2時間

#### (4)事前準備

①すくもをできるだけこまかく砕き、灰汁(あく)または苛性ソーダ液でよくねしておく。(前日)

②①のすくも1キロを40リットルのポリ容器に入れ、水またはぬるま湯をいっぱいに入れる。苛性ソーダ(60グラム)を加え、棒でよくかき回す。PH11.5ぐらいにする。ハイドロサルファイト(40グラム)を振り入れ、1～2時間藍の沈殿を待って染める。

#### (5)教材・道具

- ・すくも(藍を発酵させたもの) ・棒 ・ゴム手袋 ・黒っぽい服
- ・苛性ソーダ ・針、糸、スズランテープ、木片など
- ・ハイドロサルファイト ・木綿の布、Tシャツ
- ・40リットルのポリ容器(ゴミペールのようなものでよい)
- ・PH試験紙

#### (6)方法

①布は絞ったり、木片ではさんだりした後、水につけてぬらし絞しておく。

②強アルカリ液なので、必ずゴム手袋をして染める。①を静かに液中に入れ、液面に出さないように気をつけながら1分間ほど染める。この時布を落とさないように気をつける。沈殿しているすくもに触るとムラになる。

③静かに引き出しなるべく固く絞る。空気中で酸化させると布は、あめ色→緑→青と変化していく。一度では淡い水色なので求める色になるまでこの作業をくりかえす。

④しかし、2度目以降は1分間ではなく30秒ぐらいでひきあげるのがいい。

ハイドロサルファイトは過還元しやすいので、せっかく染ったものもまた還元してしまうからです。

⑤何度かくりかえし好きな色に染ったら水洗する。ぬるぬるがなくなるまでよく洗う。

⑥絞りや木片をはずし、もう一度洗い、その後一晩水につけて白いところに入ったあくを抜く。

⑦干す→出来上がり

#### (7)発展

アルカリをPH試験紙でPH10～12ぐらいにしておいてやれば、数か月間染浴をもたせることができる。染める前にかきまぜてハイドロを振込んでやる。

(8)参考書など 染織と生活 No.29 (特集:藍 家庭で藍を建てる 岡本哲夫)



## 2、藍のたたき染め

藍葉の実際の使用方法は、発酵させてスクモをつくり、これを地中の中に埋めたカメで灰汁とブドウ糖などで微生物のご機嫌をとりながら自然発酵させて染めます。しかしスクモを作ることが発見させる以前は、生葉を直接布にこすりつけて染めていたと思われます。藍の葉は、葉緑素の他にインジゴ分を含んでいるので、生葉を布にこすりつけると青く染まります。薬品を使わずに簡単にできます。

化学建の藍染め(絞り、板じめ)などと組合わせても楽しいですよ。

- (1)季節 夏
- (2)場所 中津川村キャンプ場
- (3)対象者 小学生～大人
- (4)所要時間 1～2時間ぐらい
- (5)必要な装備・材料
  - ビニールまたはサランラップ、
  - 木づちまたは丸い石(にぎりやすいもの)
  - 布、Tシャツなど、藍の生葉、
  - セロハンテープ、酢



### (6)実施の方法

- ①用意した布にどのように染めていくか、デザインを考える。
- ②平な床、またはテーブルの上に新聞紙、布、葉、ビニール(またはサランラップ)の順に重ね、丁寧に石または木づちで葉がつぶれるまでたたく。葉をセロハンテープで固定するとたたきやすい。
  - \*Tシャツなど、反対側が染らないように布地の間に新聞紙を挟む。
- ③葉がよくつぶれたら、葉を丁寧にはがし、布を空気にさらす。時間がたつと藍の色素が空気中で酸化し、緑色から藍色へと変化していく。(1晩ぐらいおきたい)
- ④布を石鹼でよく洗い、葉緑素をおとす。淡く青い葉の形が現れる。
  - ④食酢を2倍に薄めた溶液の中に、染めた布を2～3分浸し、藍の色素を定着させた後、水洗いして乾燥させる。



#### (7) 注意事項

藍の葉によって含む色素の量が違うので、なるべく葉が青々としているものを選ぶと濃い色に染める。

藍は、3月～4月に種をまき、7月～9月まで葉が使える。

### 3、コケ染め コケ染めとインディアン編み

(1) 季節 いつでも

(2) 地域及び場所 大滝村(コケの有るところならどこでも)

(3) 対象者 小学～ 大人一般

(4) 時間 1日

(5) 目的

コケがたくさん木についているのは、私等が染めるためには好都合ですが、果たして木にとってはどうなのでしょう。「コケがつくことによって木はどうなってゆくのだろう。コケ自身はどんな生活をしているのだろう。」とコケと木のお互いの立場を考えてみてもいいし、コケで染めて使うことによって、いろいろな小さなコケに注目してみるのもよいと思います。

インディアン編みは、編み棒を使わず、手の指だけで編むメリヤスです。道具がなくても自分の体を使ってものを作ってみることに挑戦してみましよう。

(6) 実行の形態

①まず、コケを集める。ウメノキゴケか、マツゲゴケ。毛糸の重さの 1/4～1/2 集める。

②毛糸は中性洗剤に30分つけて、ぬるま湯ですすいでおく。

③ぬるま湯でぬらして軽く脱水(むらにならないようにするため)

④集めたコケの重さを計り、ストッキングにつめる。

⑤ボールにストッキングに入ったコケと湯をひたひたぐらいになるまで入れ、火にかける。30分ぐらい棒でつつきながら煮る。

⑥大きな鍋に毛糸の重さの20～30倍の水を入れ、⑤のコケと液を入れる。

⑦火にかけて温度が40度くらいになったら③の毛糸を竹の棒にかけてそっと入れる。むらにならな

いようにときどきまわす。熱くなったら(70度くらい)竹の棒から毛糸をはずし、液の中へ入れてしまう。

⑧時々棒でつついて上下ひっくりかえす。このまま2～3時間小さな火にしてふたをして煮る。(ぐらぐら沸騰させてはだめ)

⑨火をとめてそのまま冷やす。鍋に手が入れられるくらいになったら、取り出してぬるま湯で洗う。軽く脱水し、日陰に干す。

⑩乾いたら毛糸玉にしておく。

⑪インディアン編みでマフラーを編む。

#### (7)安全及び注意事項

火傷をしないようにゴム手袋を用意する。毛糸は急に熱いところから冷たいところへ移すとかたくなってしまいます。ねじってぎゅっとしぼるのもだめ、丁寧に取り扱いましょう。インディアン編みは、太い毛糸で編むと簡単で、進みが早い。

### 文化体験Ⅲ インディアン編み

#### (1)プログラムのねらい

特別な道具を使わず、手だけで、時間もかからずにできる。みんなにとけ込めないでいる子どもでも楽しく参加できるプログラム。

#### (2)所要時間

好きなだけ

#### (3)事前準備 なし

#### (4)教材・教具 太い毛糸

#### (5)方法

①利き手でないほうの手よりも少し大きく、毛糸で輪を作る

②すべての指に交差してかける

③毛糸を手前に張り

④上の糸をひっぱって、輪を作る

⑤その輪の中に指を通す

⑥それを各指で繰り返す

⑦端までいったら、また同じことを繰り返す

⑧手の裏の方に編まれたものができる

⑨最後は鎖編みを止める要領で、指にかけてできている輪を隣の輪に通し、それを繰り返す

⑩最後に引っ張る

(6)発展 長く編む 3本～4本編んで、はぎ、マフラー・セーターを作る

### 文化体験Ⅳ 粘土細工(器、小物入れづくり)

#### (1)プログラムのねらい

自分の作りたいものを思い描きながら、リラックスした状態で粘土をこね、思いのままの造形を楽

しむ。実際に作ったものにいろいろ入れて楽しんでみよう。

(2) 所用時間

1時間 完全乾燥は1～2週間かかる

(3) 事前準備

材料を揃える

何を作りたいかイメージをふくらませる→デザイン画を描いてみる

(4) 教材・教具

粘土・水・段ボール破片・はし・スプーン・ぬらしたタオル(ぞーきん等)

(5) 方法

①使う粘土を台の上でよくこねておく。

②段ボールの上で作業する。25×30cm くらいの大きさの段ボールの上に粘土を置く。(休憩中はぬれタオルを上にかけておいて、乾きを防ぐ)

③作りたいものをイメージする。

④器などは段ボールごとまわしながら制作

＜粘土で器を作る A＞

手順1 粘土の直接穴をあけて

手順2 器を作る

＜粘土で器を作る B＞

手順1 粘土のかたまりを3つにカット

手順2 中央部を平たく伸ばし

手順3 ハンバーク状にする

手順4 その表面にキズをつけて、粘土のひもを積み上げていく

手順5 積み上げた粘土の表面を平になめらかにする。

(6) 発展

縄文粘土は乾燥にたいへん時間がかかり、焼きが入らないと壊れやすく、もろい。

そこで、粘土を紙粘土にするとよい。

## **文化体験Ⅴ 木工**

落ちている木の枝やたき火の薪、大工の作業場に落ちている木っ端など、材料な何でも良いです。子どもたちのアイデア次第で何でも出来ます。しかし、日頃から物を作ることに慣れていない子は、なかなかのってこないものです。そんな時は、リーダーがヒントになるものを作ってやると良いでしょう。例えばペーパーナイフや、スプーン、木彫りの人形、すてきなペンダントでも良いでしょう。冒険学校では将棋の駒を作ったりもしました。





- (1) 季節 いつでも
- (2) 地域及び場所 大滝村どこでも
- (3) 対象者 小学～
- (4) 時間 30分～数日
- (5) 必要な装備 クラフトナイフ、彫刻刀、糸ノコ、紙ヤスリ(粗め 800 と仕上げ 2400)、木工用ボンド、救急セット
- (6) 注意事項 子どもの発想をじゃましないようにする。刃物を使う活動なので、ナイフの使い方をその場で教えていく。木くずやゴミがたくさん出るので、後片づけまでしっかりやる。

## **文化体験Ⅵ 炭焼き**

今ではあまり見られなくなった山村の伝統産業である炭焼き。中津川村キャンプ場には昔ながらの炭焼き窯が築かれ、キャンプ場で使う炭を焼いている。

- (1) 季節 いつでも
- (2) 場所 中津川村キャンプ場
- (3) 対象者 小学生～
- (4) 所要時間 作業半日～一晩 炭がやけるまでは10日ぐらいかかる。
- (5) 必要な装備・材料

軍手、炭材、スコップ、ノコ、斧、バケツ、ヘッドランプ、防塵マスク、炭を入れる袋、フルイ

- (6) 実施の方法

炭材の詰め込み～

ナラ・カシ・ブナ等が良い炭になる。

① 窯の底にそだ木(細い枝や小径木)をしきつめる。これは「敷き木」と言って、炭化中に炭材からしみ出た樹液によって湿った窯の底に、炭材が直接触れないようにするためである。

② 排煙口を挟み込むようにして形の良い炭材を2本立てる。すると排煙口のまわりに隙間ができて、煙

が流れやすくなる。炭材は根元に近い方を上にして立て、窯の奥の方からぎっしり詰め込む。炭材と天井の隙間には、小径木(「上げ木」と言う)を横詰めする。窯の口近くは、燃えてしまうため、太かったり、質の悪い木を並べる。

③石を組み水でねった粘土で隙間をふさぎ、窯口を作る。

炭焼き～

窯口で火を燃やし、焚き口、煙突口の空気の量を調節しながら、煙の湿度・色の変化(水っぽい白色→褐色→白色→紫色→透明)に十分注意して炭を焼く。煙の温度が約 80℃になったら、通風口を残して窯口を閉める。さらに煙が透明になったら、1週間ゆっくり時間をかけて炭化させる。

出炭～

窯の中の火が消えたら窯口を開ける。暗くて熱い窯の中での仕事は汗だくになりかなりきついですが、でき上がった炭をフルイに集めて外に出す。のこぎりで適当な長さに切りそろえ、袋に詰める。

(7)注意事項

やけどをしないように、気をつける。炭材にこだわらず、杉の間伐材などで炭を作ってみてもよい。野菜やくだものなど一緒に入れて鑑賞炭なども作ることができる。



## 文化体験Ⅶ 鉄砲堰～木を運ぶ知恵

大滝村は、森林の面積が96%を占める山村です。昔から林業がとても盛んでした。しかし険しい山から木を運び出すのは大変な仕事でした。現在は索道(ケーブル)やトラックにより運び出していますが、昔の人は木材を売り出すためにいろいろな方法を考え出しました。木を運び出す知恵をここに紹介します。

\* 木材の流れ

木は、伐採されるとヒラ(シラ)や木馬で川まで運ばれ、川から鉄砲堰で下流へ運ばれます。そして製材所へ行き、家や家具の材料になりました。

\*ヒラ出し(シラ出し)

沢沿いの地形を利用して、すべり台のようなものを作り、木を下へすべり落とす方法をヒラ出しとかシラ、シュラと言う。木のすべりを良くするためにヒラ(シラ)の真ん中3本(ボウズ)に水をまき、凍らせたそうだ。(上の方だけ)すごい勢いで落ちていくので、割れてしまう木も多かったらしい。割れないように木を切るときにとがらせて切ったり、一度にたくさんの木を出したりしていたそうである。

\*木馬(きんま)

木のソリに木をのせ、木馬道の上をすべらせて運んだ。平らな所ではひっぱり、急斜面では、ワイヤーをかけ、ブレーキをかけながら運んだ。

ヒラ出しや木馬はとても危険な仕事だったが、大滝村には名人と言われる人がたくさんいた。

\*ツル、トビ

## 文化体験Ⅷ 紙すき

(1)時間 紙を漉くだけなら2時間程度

(2)実行の形態

① 楮(コウゾ)の樹皮を剥ぐ。外皮を取り除き、内皮だけにする。

②楮煮(かずに) 大きな煮釜で、楮をソーダ灰と一緒に2〜3時間煮る。

③楮晒(かっさあし)煮てやわらかくなった楮を川でるいは水槽の中で水にさらし、アクを抜く。それから、しの棒を使って楮の傷やチリを一本一本丁寧に取り除く。

④叩解(こうかい)または楮打ち(かずう)きれいになった楮を木槌でよく叩く。打解機、ホーレンダービーターがあれば、それを使い繊維をほぐし、水にとけやすくする。

⑤トロロアオイ叩き トロロアオイ(アオイ科の植物)の根を木槌でくだき、水の中に粘液(ネリ)を抽出し、布袋でろ過する。

⑥紙漉きの用意 漉き舟に水を張り、繊維のほぐれた楮を入れ、竹ざおでよくかきまぜる。楮が水にとけたら、ネリを加え、再び十分にかき混ぜる。(この溶液を紙料カシロという)





⑦紙漉き 漉簀(すきず)と漉桁(すきげた)を用いて行なう。漉簀を漉桁にはさみ、まず紙料を浅く汲み込んで簀の上に流し、紙の表面を作る(化粧水)。次に紙料を汲み込んだら、漉桁を前後左右に揺り動かして繊維をからみあわせる。目的の厚さになるまでこの作業を数回繰り返す(調子)。最後に漉簀の上に残った紙料を、漉桁を手前に引くようにして流し捨てる(捨て水)。漉簀は、漉いた面を裏返しにして次の紙を漉く。

紙床(しと)台の上に湿った布を敷いた紙床板をのせ、漉きあげた紙を重ねていく。紙の上に鉛筆で名前を書いた小さな紙をのせておくと、後で誰が漉いた紙かわかる。(インクで書くのにじむので必ず鉛筆を使う)紙の中に押し花・押し葉・色紙など入れる時は、まず厚い紙を漉き、その上に花や葉をのせ、薄い紙を漉いて重ねあわせる。2枚の紙と一緒に乾燥させると、花や葉などがすきこまれた紙ができあがる。



⑧紙床の圧搾(かんだしぼり) 重なった紙をジャッキを使い、少しずつ圧力をかけて水気をしぼる。ジャッキが無い場合は、重しをのせてしぼる。

⑨紙の乾燥 水気をしぼった紙を手前右下からめくって、一枚づつはがし、刷毛を使い簀にせった面を鉄板乾燥機に張り付ける。でき上がった紙は鉄板に接した面が表となる。鉄板乾燥機が無い場合は、板に張り付けて自然乾燥させる。

### (3)安全及び注意事項

鉄板乾燥機を使い和紙を乾かす時、鉄板に触れないように注意する。



## 文化体験区 おつきりこみ作り

山梨ではほうとう、群馬及び埼玉北部の農村地帯では煮ぼうとうと言われ、この大滝ではおつきりこみと呼んでいます。

農作業から帰ってきたお母さんが、畑で取れた野菜をたくさん入れて作る素朴な料理です。野菜が煮えるまでにうどん粉をこねておき、野菜が煮えた頃、醤油などで味付けした鍋に、こねたものを切ってそのまま入れて煮込みます。昔は貧しかったのであまり夕食に米など食べられなかったのも、いろいろな具をいっぱい入れたおつきりこみがご飯の代りになり夕食となっていました。

(1)季節 いつでも

(2)場所 大滝村

(3)対象者 小学生～大人

(4)所要時間 約2時間～4時間

(5)必要な装備・材料

材料:餅米、とちの実(アクを抜いたもの)、片栗粉、あんこ、

器具:臼、杵、バケツ、のし板、ザル、箸、せいろ、布巾

(6)実施の方法

材料:5人分

小麦粉、白菜1／4、ねぎ1本、かぼちゃ1／4、里芋5個、ナス2本、

醤油 150cc、塩大さじ1、市販のだし大さじ1

その他ゴボウ、大根等好みにより入れてもよい。



## 文化体験Ⅹ コンニャク作り

(1)ねらい

(2)プログラムの背景

(3)所要時間4時間～5時間

(4)教材・教具

材料:生のコンニャクいも1Kg、炭酸ソーダ 50g、水4リットル、酢、塩

器具:おろしがね、型わく、さらし用おけ、しゃもじ、なべ

(5)事前準備

こんにゃくは、大滝村で作っている人に売ってもらった。

(6)方法

①生いもの芽、根、皮をタワシで洗い、きれいに取除く。

②なべに水を入れ、そのなかに皮をはいたいもをすりおろす。

\* 酢水に手をつけて、塩をよくすりこんでおくと、手がかぶれにくい

③火にかけて、こげないようによくかき混ぜながら 20 分くらい煮る。

④ねばり気がでて糸を引くようになったら火をとめ、60℃位に冷ます。

⑤炭酸ソーダを水にとかし、少しづつ加えながらしゃもじで強にかき混ぜる。

⑥型わくの中に流し込み、平らにならして冷えるまでそのままにしておく。

⑦冷えて固まったら包丁で適当な大きさに切り、よく沸騰させた湯で 20～30 分煮る。

⑧冷水にさらし、あくぬきをしてコンニャクのできあがり。

## 文化体験ⅩⅠ 豆腐作り

(1)材料(2丁分)

大豆260g にがり7g(小さじ1) 水2、6リットル サラダ油少々(泡消し用)

器具:ミキサー、鍋(2つ)、こし袋(さらしの袋)、しゃもじ、おたま、ざる、仕上げ布、

豆腐を固めるための容器

(2)方法

①大豆をきれいに洗い、たっぷりの水につける。(水につける時間は、夏7～8時間、春秋14～16時間、冬22～24時間)

②大豆を数回にわけ、ミキサーにかける。ミキサーには、大豆がひたひたになるくらいの水を入れて、約2分かける。できたものを呉(ご)という。

③用意した残りの水を深い鍋に入れ、沸騰させる。この中に呉を入れ、焦げつかさないように、しゃもじでかき回し、再び沸騰したら弱火にして10分煮る。

④呉をこし袋に入れてしぼる。とても熱いので注意！(しぼりかすをオカラ、こされた液を豆乳と言う。

⑤できた豆乳の温度を73度～75度に保ち、100～200cc のぬるま湯に溶いたにがりを入れる。にがりは少しずつ2～3回に分けて入れ、静かに十文字にかき混ぜる。豆乳の温度が70度以下になると、固まらないので、温度が下がったら火にかけて熱を加える。

- ⑥一部分でも、黄色く澄んできたら、10～15分位待つ。
- ⑦ザルを入れ、おたまで黄色の上澄み液を汲み出し、仕上げ布を敷いた箱の中に、固まりかけの豆腐をおたまですくい入れ、布でおおう。
- ⑧木ぶたをして、軽い重石(コップに水を少し入れたものでも良い。)を置き、15分位待つ。重石が重いと、豆腐はかたくなる。
- ⑨豆腐が固まったら30分位水にさらし、にがりのアクを抜く。

## **文化体験ⅩⅡ 石焼き**

石焼は、石を2時間ぐらい焼いて、その焼いた石で肉や野菜を焼いて食べるというものだが、すごくおもしろい。子供ならずも大人まで興奮してしまう。そしておいしい。中津の山中高久氏の指導により、見よう見真似でやってみた。

### (1) 木を探す

2～3時間火を燃やすので、流木など太い木を探してくる。今回はキャンプファイヤーのあまりをもらった。

### (2) 石をさがす

平たくて大きくて、割れないような石を探す。石を落として強さをみたりする。すぐに割れてしまうのはだめ。白っぽい石が良いということだ。

### (3) 火を燃やす。

大きな木に火がついたら、上に石を置き、火をガンガンに燃やし続ける。石の上にも木を置き、燃やすと石にすすがつかない。2時間～3時間ぐらい燃やす。

### (4) 食べる。

石が真っ赤になってきたら、L字になっている木などを利用して、石を取り出す。

焼けた石の上で肉や野菜を焼く。(地元の人にはホルモンやキャベツ、ミズナなどのせる。)

直径30cmぐらいの大きさの石でも、3回ぐらい焼ける。

### (5) 後片付け

焼き終わった石に、水をかけて汚れを落とす。まだ熱い石に間違えて座らないように気をつけよう。

## **文化体験ⅩⅢ にわとり解体**

- ①ニワトリの首の羽をむしり、皮膚を切り、頸動脈を引き出し、ハサミで切る。
- ②ニワトリを逆さにして、血を全部出す。暴れるので、しっかり押さえる。鶏冠の色がだんだん黄色になる。
- ③ニワトリまるごとお湯につけてから、羽をむしる。
- ④食道を切って結ぶ。(これをしとくと内蔵を出すとき臭くない。)
- ⑤肛門のまわりを切り、内蔵を傷つけないように手で取り出す。メスは卵が出てきたりする。
- ⑥2～3日ねかすと、肉が軟らかくなる。

## **文化体験ⅩⅣずりあげうどん**

大滝村の山仕事をする人たちの、簡単料理。どこでもみんなで、すぐにおいしい。うどんをずりあげて食べるから、ずりあげうどんと言うらしい。地元の人には、ずりあげる道具をその辺の竹などで簡単に作ってしまうところが、またこのうどんのおいしいところ。

- ①たっぷりのお湯を沸かし、乾麺をゆでる。
- ②お椀に、醤油、鰹節、七味、のりを入れておく。
- ③麺がゆであがったら、麺とゆで汁をお椀にとり、食べる。

## **???体験Ⅰ ベビースターうどん**

子どもたちが、うどんを打っている間に考案したメニュー。本格手打ちうどんを、カレー味やしょうゆ味、コンソメ味にして、揚げる。これがカリカリとしてうまいので、子どもカンパニーという会社ができ、CMソングまで作ってしまった。

最近本物の「ベビースターうどん」というのが発売されたという。子どもたちは本当に未来を担ってるなと感じる今日この頃である。

## **???体験Ⅱ ヤミナベ**

子どもたちはみんなやりたいと言うが、これほど後悔するものはない。一応「食べ物だけ入れよう。ただし香辛料はなし」というルールのもとで行う。都会と違い、山の中だと本当に真っ暗になるので、恐ろしい。この前やったのは、真っ暗の中、一応具を取って、明かりをつけて食べよう。ということになり、取ったおかずは残してはいけないという厳しいお達しだった。干し柿、納豆、あんこもち、それはないよ。みんな、ひどいよ。結果は、もう目に見えているのだが、あえて、子どもたちはなんでやりたがるかな。翌日のヤミナベの残骸は、食べ物とは思えないおぞましき姿である。それを前にして、「食べ物を大切に」などとはとても言えないプログラムである。



## ???体験Ⅲ 超デカプリン

### ①作り方

市販のプリンの素40個分を、大きいボールで作る。大きいので、水の分量を少な目にしたほうが、プリンがくずれない。

### ②開け方

大きな飯台か、段ボールにサランラップをまいた台を用意し、いよいよプリンをあける。この時、みんなドキドキする。台をボールにのせ、そのまま逆さにして、そっとボールをとると、ぶるるんとふるえるプリンが横たわっている。



### 食べ方

みんなでスプーンを持って、一斉に食べ始めるか、きれいに切り分けて食べるか、子どもたちで話し合う。前者の方は、余るプリンが汚いので、食欲をそぐ。

残ったプリンの行く末は、罰ゲームで使われる。ゲームで負けた人が、一口ずつ食べるなど… あまり参加したくないが、毎年やっている。なぜかみんなやめようとしない。

## 7. 冒険学校の新しい行方

農山村においてフィールドワークを行う自然文化誌研究会は調査地域において、伝統的な文化や技術を学んでいる。農山村は既に、全国的にも急激な過疎となっており、その地域独自における文化の継承は難しくなっている。

調査地域にキーパーソンが見つかることで、「今度はぜひ子どもたちを連れてきていろいろ教えてほしい、伝えてほしい」ということにより、「子どものための冒険学校」だけではない、成人を対象とした「冒険学校」も始まっていった。

冒険学校の新しい行方について話を進める。

### ＜子どものための冒険学校の歴史＞

| 講座名称        | 通算期数    | 年度         | フィールド  | 備考           |
|-------------|---------|------------|--------|--------------|
| 子どものための冒険学校 | 第1～3期   | 1988～1990年 | 五日市    |              |
| 子どものための冒険学校 | 第4～13期  | 1991～2000年 | 大滝村中津川 |              |
| 子どものための冒険学校 | 第14～15期 | 2001～2002年 | 東京学芸大学 | デイキャンプ×全7日   |
| ぬくい少年少女農学校  | 第16～17期 | 2003～2004年 | 東京学芸大学 | デイキャンプ×全10日程 |
| ちえのわ農学校     | 第18期～   | 2005年～継続   | 東京学芸大学 | サークルちえのわ主催   |

### ＜それ以外の冒険学校の歴史＞

| 講座名称       | 通算期数   | 年度         | フィールド  | 備考                  |
|------------|--------|------------|--------|---------------------|
| 沙流川冒険学校    | 第1～7期  | 1998～2004年 | 北海道二風谷 |                     |
| タイ環境学習キャンプ | 第1～18  | 1995～2015年 | タイ王国   |                     |
| こすげ冒険学校    | 第1～10期 | 2006～継続    | 山梨県小菅村 | 2004、2005は「やせいキャンプ」 |
| おきなわ冒険学校   | 第1～4期  | 2003～2006年 | 沖縄県読谷村 |                     |

### 1. デイキャンプとなった「子どものための冒険学校」(第14～15期)

第13期までは、五日市～大滝村にて6泊7日の長期キャンプを開催してきた。この頃、何度も議論を重ねた結果、第14期からは、毎月1回のデイキャンプを合計7日間行うことで、これまでの冒険学校を踏襲することとした。会場は東京学芸大学附属環境教育実践施設となる。

藍染体験や昆虫教室。豆腐作りなど、これまでの実績を生かした活動を行っている。

なぜ、14期から長期キャンプを止めてしまったのか？大きな理由は2つある。

第一に、スタッフ全体の力量が低下したことにより、十分な安全管理が難しくなったことである。そもそも自然文化誌研究会は、伸び縮みする組織であり、「去る者追わず、来る者拒まず」という体質がある。冒険学校における考え方は継承されていたが、安全面に関しては、赤十字の方をお招きして事前に行う医療講習会だけでは追いつかない。自由な組織であるが故の矛盾を抱えている。

第二に、自然文化誌研究会全体で、率直に言えば「飽きた」ということだ。パイオニアワークを心掛け

る当会において、冒険学校がマンネリ化してしまったのだ。この思いは協力してくれるスタッフよりも運営サイドに強かった(運営委員会・事務局)。6泊7日の長期キャンプスタイルは当初パイオニアワークであった。10年以上経った時に、多くの団体が長期キャンプを開催している。自然文化誌研究会として当初の役目＝パイオニアを十分に務めた！ということであり、新たなフィールドを開拓することをしたかったのだろう。

実際に、1998年まで事務局長であった岩谷美苗氏は、樹木医として新たなNPOを立ち上げて活躍している。

## 2. 「ぬくい少年少女農学校」(第16～17期)

東京学芸大学附属環境教育実践施設で開催した「子どものための冒険学校14～15期」。どうも、こいつは冒険学校ではないなあ・・・ということであった。毎月1回のデイキャンプを生かすのならば、何を核とするか―「農」だ。ということで、冒険学校の継続として「ぬくい少年少女農学校」とした。

この頃、東京学芸大学教育学部には「F 類環境教育学科」が編成されたため、冒険学校のメインスタッフが、冒険探検部学生から、環境教育学科の学生に変遷している。

「種から便」へをテーマに、「待つ精神」をもった農学校としてスタートする。自然文化誌研究会とともに、学生スタッフにもぬくい少年少女農学校の事務局・運営を一緒にやった。

通算の第17期を終えたときに、東京学芸大学の公開講座としての取り組みも終了した。

17期目は、この頃、事務局機能が山梨県小菅村に移動しているため、実質的な運営は環境教育学科の学生たちが行っている。

### 冒険学校のその後① ～ぬくい少年少女農学校～

13年間続けてきた農山村での生活体験キャンプのスタイルから新しいスタイルへの挑戦の一つとして、14期冒険学校から東京学芸大学でのデイキャンプを始めました。そして翌年の2002年、年間を通じた食農体験学習の場として新たに東京学芸大学公開講座「ぬくい少年少女農学校」として開校することとなりました。ぬくい少年少女農学校の三年間の活動には、延べ人数159名(参加者61名、学生スタッフ数98名)の人々が関わりました。テーマは、「種から胃袋まで」(中尾佐助)の体感。これまでの冒険学校のスタイルを引き継ぎながら、大学の農場を舞台にどんな活動が展開できるのか。スタッフも参加者も、みんな手探り状態からスタートしました。今思えば、ぬくい少年少女農学校が「冒険学校時代を知らないスタッフ」の奮闘記の初めの一步になっていたのだな—と思います。

### 2002年度 第一期

初めはスタッフも参加者も手探り状態。本当にみんなが「わからない」という形からのスタート。だから、参加者のみんなが毎回楽しみに来てくれるのは嬉しいんだけど、、、いつも活動前にスタッフは必死になってプログラムを練っていたのを覚えています。中でも、参加者との接し方や働きかけ、農学校とは何なんだ!?というディスカッションをたくさんした様に思います(この議論は農学校8年目の2009年現

在もなお続いていますね)。

畝を立てるのにも一苦労の種まきから始まり、ほおの葉でのちまきづくり、泥んこの田植え、ミクロハイクを使った彩色園の地図作り、基地・パン釜作り、身近な野菜(玉葱の皮、茄子の皮、トマト)を使った染め物Tシャツ作り、鍋パン作り、芋版、芋煮会、正月飾りなどなど、盛りだくさんの一年間でした。僕の一番の思い出は、、、何ととっても太い竹で作った初めてのバームクーヘン！みんな、覚えてるかな？

第一期農学校。木俣先生(カツンボ)、原子先生(アトム)のアイデアや助言に助けられながら、何とかやり遂げたぞ————!という一年でした。

(参加者 17 名、スタッフ 25 名)



## 2003 年度 第二期

この年の始まり。それはこわ〜いこわ〜いスタッフ会議から始まったのでした。今でも伝説として語り継がれるくらいの。どんな会議だったのか！？それは、その時に新入生で参加した4人組に聞いてみて下さい。「たけ、しぶ、さぶ、はり」、その後数々の伝説を生み出す4人衆参戦の年でした。たくややかっちゃんもこの年の新入生でした。二年目ともなると大所帯になるもので、スタッフのバリエーションも大学院生・社会人・他大学の学生と多様化し、新スタッフを沢山迎えた年でした。自然文化誌研究会のスタッフ(井村家、鈴木家、宮本さん)も加わって、飛躍的に忙しさが増しました(汗)。夏には小菅村へのキャンプにも行ったな〜。この年の思い出といえば、失敗の連続…。高くし過ぎた畝立て、強風でトウモロコシの苗が倒れ、べちょべちょのお餅つき、白菜とのらぼうは冬の霜と鳥たちに根こそぎやられました。「農学校なのだからもっと畑・田圃への関わり方を強めよう！」と畑作りや田畑の手入れに重点を置いた年だったんだけど、、、でもどれもこれも今となってはいい思い出ですよ！！

しぶ&ゆき&ふじさんの料理人コンビの登場、たっくんの「ゲッツ！」の流行、宮本さん指導の豆腐作り、最後に登場したのは飛び出す修了証、思い出の尽きない一年でした。この他にも、収穫祭(野菜料理大会)、どろんこ稲刈り、小菅村での文化体験、樹木の葉を使った染め物、、竹を切つての流しそうめん、腐葉土作り、注連縄作りなど。急激に活動を拡張した年でした。

(参加者 14 名・スタッフ 30 名)





### 2004 年度 第三期

定員の 25 名を超える沢山の応募(41 名)がありました。せっかく活動をしているのだから出来るだけ多くの子どもを参加させたい！！という想いで、田畑を拡張して、大人数を想定した活動計画・スタッフ配置を考えて、2009 年現在の農学校までを考えてもこの 2004 年度が最も大きな規模の農学校を運営した年なのではないかと思います。何だか毎年、「拡張し過ぎた」と書いているのに、さらに大きくなっていたのです。そして、またもや規模の大きさにさらに翻弄された年に。。。活動日は全部で十回！！宿泊も2回(夏と冬)に増えました。この年は多くの一年生が仲間入りしました。あや、つつ一、まっつ、れいにん、みつみ、まっきー、めぐ、イタロー、やまたか、かずぱん、、、、初農学校スタッフがいっぱい。今や INCH でキャンプの料理番となっているあやちゃんもこの時はピカピカの1年生でした。

活動として新しいアイテムとなったのが「スケッチブック」。まだ持っている人も多いよね。ぜひこの機会に読み直してみよう！スケッチブックには、その日の活動内容や気が付いたことや感じたこと、疑問に思ったことなどを絵や言葉、写真や押し花などで書きました。次の活動の時には、前回の振り返りを配って貼りました。農学校の年間の活動のつながりをより強く感じられるアイテムになりました。

檜原村の山の中まで活動用の間伐材を取りに行き、木工・薪割り・東屋づくり。アイヌの浦川治造さんをお招きしてのアイヌ料理、本物の農家の現場を見学(みんなより背丈の高い野菜に囲まれたよね)、太陽光でお風呂を沸かそうプロジェクト、夕顔でのかんぴょうづくり、ジャンボカステラ作り、「植物に名前を付けよう！」プログラム、鮭のチャンチャン焼き作り、竹で水鉄砲作り、新しい活動プログラムが沢山生まれた年でもありました。活動写真の数は、何と過去最多の 2570 枚！！撮り過ぎ。。。。

(参加者 30 名、スタッフ 40 名)



初めて包丁を握った人、野菜嫌いだけれどちょっとずつ食べられるようになった人、学校や年齢の枠を超えた仲間ができた人、土に触れるようになった人、昆虫に触れるようになった人、ちょっとお父さんお母さんから自立し始めた人、子どもと接するのが平気になった人、人前で喋れるようになった人、たくさんのみんなの成長の場となったぬくい少年少女農学校。でも、活動が続けていく中で、農作業、文化体験、調理、安全管理、多くの面で規模とスタッフの力量・容量との兼ね合いに問題が生じてきてしまっていました。沢山の年齢の子どもや大人が同じ場にいるほど、活気がある疑似社会ができる。でも、今の慌ただしい形態が農学校のコンセプトに合っているのだろうか。そんな疑問を持つ声も少なくありませんでした。





農学校のテーマは何だったのか？何を伝え、何を感じてほしいのか。その初心に立ち返るために、私たちはまた新たな形の農学校へと歩むことにしたのでした。

(西村 俊)

## 保護者アンケート集計結果

解答数:25 無回答:1 有効解答数:24

Q1. 本年度の公開講座をどこで知りましたか？(複数回答)

|              |         |
|--------------|---------|
| a. 大学からの募集案内 | 22      |
| b. アサヒタウンズ   | 1       |
| c. 知人の紹介     | 0       |
| d. 去年から参加    | 1       |
| e. その他       | 2(aに該当) |

あなたのお子さんについての質問—あなたから見て、分かる範囲でお答えください—

Q2. あなたのお子さんの参加動機はなんですか？(複数回答可)

|                          |    |
|--------------------------|----|
| a. 以前から食や農に興味があった        | 8  |
| b. 「農学校」を知って、食や農に興味が変わった | 3  |
| c. 面白そうだから(野外観察や動植物が大好き) | 13 |
| d. 友人・知人が参加するから          | 3  |
| e. 保護者からの勧め              | 7  |
| f. その他                   | 0  |

Q3. 「農学校」に参加する以前にお子さんには食農に関する体験学習活動の経験がありますか？  
(複数回答可)

|               |    |
|---------------|----|
| a. 学校         | 0  |
| b. ご家庭        | 6  |
| c. その他・サークルなど | 2  |
| d. 特にしていない    | 17 |

b. ご家庭

- ・農家であり、市の農業体験の会場として、大根、とうもろこし、じゃがいも等経験
- ・ごく近所に住む祖父母が農家の為うまれてからずっと
- ・食卓に上る食材などについて話しをする
- ・2年位前から食物を育てたり、調理をしたがったりしました
- ・幼児の頃よりベランダ栽培、親せきの貸農園作業
- ・小1の頃から家庭菜園で、父の手伝い

c. その他・サークルなど

- ・ボーイスカウト活動を通し野外料理に興味があるようです
- ・センス. オブ. ワンダ自然学校

Q4-1. お子さんは、ご家庭で「農学校」のことを話しますか？

Q4-2. どちらから話しかけることが多いですか？

| Q4-1              | Q4-2     | 計 | 合計   |
|-------------------|----------|---|------|
| a. よくする           | a. お子さん○ | 9 | 11   |
|                   | b. 保護者●  | 1 |      |
|                   | 無回答      | 1 |      |
| b. たまにする          | a. お子さん◇ | 6 | 13   |
|                   | b. 保護者◆  | 5 |      |
|                   | 無回答      | 2 |      |
| c. ほとんどしない d. しない |          | 0 | 計 24 |

Q4-3. 具体的にどんな話をされましたか？

- 一日の活動内容(収穫方法) スタッフの方との関わり
- 主に収穫物に関すること
- 畑の作物のこと、スタッフの方々との交流
- フォーくんのこと 食事が毎回、とてもおいしかったということ
- 作業内容より、お友達やスタッフの方々とのコミュニケーションのついてが多いです。
- その日に体験した事 いままでやった事がない事 野菜の成長の仕方など
- 楽しかった事を細かく、ずーっと話してます。虫や動物や植物の事等です。
- その時々でやってきた事、スタッフさんのこと 作業の事
- とにかく楽しい、楽しかった事や苦労した事など
- ◇その日体験した事(わらでつなを上手に編めた事)
- ◇食べた物(料理長の作った物はおいしかった！)
- ◇フォーちゃんと遊んだ事 うどんふみ体験
- ◇ひき蛙を友達とつかまえた。もらったサツマイモでスイートポテトを作った。
- ◇畑でドロンコになった。今日は何を植えた。
- ◇ヘチマをもらったけど、これからはどうするの(水に浸けて皮むくのは父)。
- ◇ヘチマの種は鳥が食べてしまった。
- ◇農学校でやった事
- ◇秘密基地のこと 収穫物のこと 宿泊の時は、仲間とどんなふうにしたか。
- ◆その日の活動内容 昼食について
- ◆スタッフの方の話
- ◆いろいろな経験をさせて頂いた事 お昼の食事がとてもおいしかった等
- ◆バジルソースを作ってくれました
- ◆農作業

Q5. 「農学校」に参加して、お子さんは変わったと思いますか？

はい:21 いいえ:2 無:1

「はい」の場合、どんなところが変わりましたか？



- ・ 自分で調理することへの興味が増した。
- ・ より活発になった
- ・ 環境について本人から話が出るようになりました。
- ・ 食・環境・生き物に対する関心が深まった。汚れるのが平気になった。野菜の味がわかるようになった。
- ・ 農作物に対する関心が強くなったと思う。
- ・ 嫌いな野菜が減った。
- ・ 野菜がきらいだったが食べれるようになった。自分で調理するようになった。皮や芯も大切に食べろ！とおこられた。
- ・ 積極的に物事に取り組むようになった。
- ・ 全てを自ら体験する事で、祖父母が日々している作業の大変さもよりわかったのではないかと・・・
- ・ 自分から進んで土いじりをするようになった。野菜の種をまくなど。
- ・ 自立してきました。(以前よりですが…)
- ・ 植物への興味が強くなった。
- ・ 野菜が食べれる様になった
- ・ 学校以外の活動に興味を持ち積極的になった
- ・ 今後、畑の実体験が野菜や食べ物に対する見方を変えてくると思う。今のところ特に目立って変わったとは見えないが。
- ・ 嫌いな野菜ががんばって食べられるようになった
- ・ 積極的
- ・ 毎回とても楽しみにしていました。作った料理を披露してくれたり、以前父親の菜園の手伝いの時より、野菜に興味をもてるように
- ・ 野菜が嫌いでしたが、持って帰った(自分たちでつくった物を)おいしいといって食べていました。
- ・ 積極性がでてきた。
- ・ 自然に関心をもった。

#### あなた自身の考えについての質問

Q6. 「農学校」に参加するお子さんと関わる中で、「食」や「農」に対してのあなたの興味・関心は高まりましたか？

|                     |    |
|---------------------|----|
| a. 「食」「農」ともに関心が高まった | 14 |
| b. 「食」に対して関心が高まった   | 2  |
| c. 「農」に対して関心が高まった   | 6  |
| d. 特に変わらない          | 2  |

Q7. あなたは「ぬくい少年少女農学校」にどのような印象をもっていますか？

- ・こどもが自然と共存する場、または有効に利用すること学ぶ場
- ・食、農がいかに大切かを関わりの中で認識できる所
- ・年間を通した体験に基づいた環境についての学びは、息子にとって貴重な経験になったようで、すばらしい公開講座だと思っています。
- ・とても楽しく御指導を頂きありがとうございました。
- ・ぜひ来年度も参加させたい
- ・貴重な存在だと思い感謝しています
- ・自然の中で学ぶ
- ・「食育」と言う言葉を何気なく聞いていたけれど、今は関心があり、子供自身が興味をもってくれた事がうれしい
- ・子供が体験を通じて知る、学ぶ楽しさを知る場所
- ・親が体験させてやりたいと思っても、できない事が多いのですがこのかんきょうの中で思う存分、1日過ごさせてやれた事うれしく思っております。
- ・「体を使って自分で考えて結果を出すことを学んでいる」と思う。子供にとっては良い体験を積み重ねてもらう場
- ・子供が本当に楽しく、生々と参加しているので、とても良い印象を持っています。ただ楽しく遊ぶのではなく、大学生の方々も小中学校生を仲間として受け入れて下さり、感謝しています。
- ・野外活動が遊ぶだけでなく農作業を行うことにより、農業がいかに大変で大事なことであるかを勉強できた。
- ・沢山のスタッフの方々が楽しく自由に運営していただき安心して子供を預けることができました。
- ・いい機会を用意していただいた。
- ・種まき→成長→収穫→食物の過程を体験できる貴重な場
- ・とてもすばらしいスタッフに頭が下がる
- ・のびのびとした心豊かになる時間をすごせる貴重な体験、農作物をより身近に感じられる集まり(→Q8)
- ・安心して子どもを預けられる
- ・普段体験できないことができてとてもよかったです
- ・大変良い活動と思う
- ・安心して子どもを預けられる

Q8. あなたはお子さんを参加させてよかったと思いますか？

はい 24

また、その理由はなんですか？

- ・異年齢の方たちとの関わりもあり、食する物も育ちの実感できた
- ・多数の人との関わりの中で成長した点
- ・息子の農学校での体験と自宅近くの環境との比較の気づきがあり、本人から話題が出たりして机上の学びでは得られない経験になったと思われる点です。
- ・これからの農家のあり方等、合わせてとてもよい経験であったと思います。
- ・生きるための基本でありながら、こどもたちから遠くなってしまった「食」と「農」を体験することができたから。何より子どもが楽しく参加していました。
- ・「食」や「農」にかかわることは、特に今、大切なことだと思うから。
- ・Q5 の解答通り(嫌いな野菜が減った)
- ・一人っ子なのでおおぜいの人と関わりをもつ事が少ないので楽しい時間が過せた。
- ・Q7 の事がたくさん出来たから(子供が体験を通じて知る、学ぶ楽しさを知る場所)
- ・なかなか普段できない体験ができて大変良かったと思う。
- ・Q7 同(親が体験させてやりたいと思っても、できない事が多いのですがこのかんきょうの中で、思う存分、1 日過ごさせてやれた事うれしく思っております。)火を使う事。毎日食べているごはんを育てる所から食べるまで など
- ・植物の育ち方を少しは理解した。来年も参加したがっている。
- ・色々な事に興味を持ち、ちょっぴり自立してきました。
- ・食物を育てる経験ができてとてもよかった。
- ・優しいスタッフにかこまれて、色々なことが体験できた。
- ・野菜嫌いだったが、農学校で収穫したものは美味しいと食べられるようになった。
- ・田植え、稲刈りといった基本的農業体験ができた。
- ・こんなにも楽しめるものにめぐりあえ幸です。
- ・のびのびとした心豊かになる時間をすごせる貴重な体験、農作物をより身近に感じられる集まり。生きる上での大切な物を身近に感じられる。
- ・農作物の名前を覚えられた。野川の水量を気にするようになった。
- ・子供が自立するようになったから
- ・農作物や自然に対する関心が高まった

Q9. 今後もこのような環境教育・体験学習の活動に参加させたいですか？

はい 24

また、具体的にどのような体験活動を望みますか？（企画してほしい活動）

- ・サバイバル系（水の浄化、食べられる植物の見分け方）、テントの設営
- ・本年のように1年間を通した体験に基づく活動がいいと思います。
- ・お父さん・お母さんのための農学校（子どもだけにやらせておくのはもったいない！）
- ・「ぬくい少年少女農学校」のような活動に参加させたい。できればもっと回数が多いほうがうれしい。
- ・川やいその生物観察 古い地層を掘り化石探し 流星観測
- ・今度は遠出もしてほしい。
- ・自然や季節を大切にした行事を取り込む。（日本の伝統など）
- ・ぜひぜひ
- ・年中行事（日本の古い風習）を体験させてほしい。
- ・特になし
- ・なかなか家庭では味あわせてあげられないので、自然にどっぷりつかったキャンプ等
- ・記入なし
- ・物を育てることの難しさが少しでも理解して欲しい
- ・食べることに興味がもっと持てるように、食材を育て、収穫し、料理して食べることまで関連づけた体験を望みます。
- ・①いろいろな栽培作業②作物の品種と③味覚（栄養）との実体験を通じて知り、生活者として重要な食のセンスをみがくようなこと。
- ・今年の内容で充分楽しめました。同じ内容でも気候等によって結果が変わってくることなどくりかえし子供に体験させたいと思いました。
- ・サマーキャンプ
- ・今のままで良い
- ・集団活動



## 農学校のその後 サークル「ちえのわ」の活動

もっと参加者との関係を深めながら、一人一人の成長を見られる活動をしたい。農学校の枠を超えた発展的な活動を目指して、ぬくい少年少女農学校のスタッフが中心となって 2004 年夏に立ち上げたのが環境教育実践サークル「ちえのわ」でした。ちえのわの活動の中で、農学校も「ちえのわ農学校」として継承され、2009 年度で通算 8 年目に突入します。

### 3. 「ちえのわ農学校」(第 18 期～)

自然文化誌研究会は、小菅村というフィールドを見つけた。小菅村で本格的に活動を行うため、事務局も小菅村に移動した。そのような状況で、小金井にて毎月 1 回の農学校を維持することが難しくなった。検討を重ねた結果、前年度から活躍している学生が中心となってサークルを立ち上げ、農学校を継承していくことになった。「サークルちえのわ」であり、「ちえのわ農学校」とした。

### サークル設立の経緯と「ちえのわ」に込めた想い

当時、農学校スタッフであり、INCH のキャンプスタッフでもあった自分たち大学生が、INCH の下部組織ではなく、新しい組織として立ち上げたのには、わけがあります。

公開講座として「農学校」を継続ができないことが決定する以前から、農学校にかかわるスタッフの組織化の議論は何度かありました。「ぬくい」を始めたころ、自然文化誌研究会の青年部を作ろうというような話もありました。そして 2004 年は、特に多くの時間をかけて、今後について語り合いました。その中で、公開講座「ぬくい少年少女農学校」を単に引き続きやっていくためではなく、農学校をはじめとする環境教育活動の充実、質の向上を図っていききたいという思いを共有し、大学のサークルとして独立する方針を固めました。

公開講座の農学校では、スタッフの勉強会などで冒険学校の考え方やノウハウを学び、活動について議論しました。それらをもとに実践する中で「農学校」流の進め方を培ってきました。自らも学び、参加者とともにつくる環境学習の場を学生主体で自らの力で発展させたい。独立心・挑戦そんな思いから新しい組織としてスタートを切りました。

その名に込めた想いがサークル化を提案した資料にありました。

#### 団体名「ちえのわ」について

自然の中で暮らす中で、人類は多くのことを自ら学び、考え、実践し、経験してきました。その中で生まれたのが、“智慧”なのです。

“智慧”とは、事の道理や筋道をわきまえ、正しく判断する心のはたらき。事に当たって適切に判断し、処置する能力。単なる学問的知識や頭の良さではなく、人生経験や人格の完成を俟(ま)って初めて得られる、人生の目的・物事の根本の相にかかわる深い叡智(えいち)。と辞書にあります。

ひとが自らの経験の中で得てきた多くの“智慧”を継承し、次世代へと繋げていく。また、今日の多くの諸問題を解決に導くため“智慧”をしばり、持続可能な社会を創造していく。そのために、自らの“智慧”を深

め、多くのひとの“智慧”を“環”として繋げ、広げていく。複雑に絡まった今日の諸問題“知恵の輪”が解けるようにという想いをこめて『ちえのわ』という名を考案しました。

|      |                                                                 |
|------|-----------------------------------------------------------------|
| 団体名  | 環境教育(実践)(活動)サークル <b>ちえのわ</b>                                    |
| 目 的  | 環境教育の実践活動<br>環境教育に関わる活動の企画・運営を通じて、部員の能力を向上させる<br>環境活動・教育活動の企画実践 |
| 活動内容 | 「食」「農」をテーマとした小中学生対象の体験学習の企画実践<br>そのほか、各々のテーマを深める。               |

2004 年 11 月 16 日 ミーティング資料より抜粋

農学校としては、14期目。ちえのわ農学校としても11期目。今でも活動は続いています。  
学生も参加者も入れ替わってもそこにかかわる人たちの「みんなと何かやってみたい」という思いがカタチになって「農学校」が継続していることをうれしく思い、「ちえのわ」のさらなる活躍を陰ながら応援しています。  
(文責：菱井 優介)



## 4. 沙流川冒険学校

### 1. はじめに

沙流川冒険学校は1998年から2004年まで、北海道沙流郡平取町を流れる沙流川流域、平取町二風谷を中心フィールドとして毎夏5～6日間、実施された。この地はアイヌの聖地であり、多くのアイヌの人々が暮らしていて、二風谷アイヌ文化博物館、二風谷アイヌ資料館等様々な文化施設も集まっている。この魅力的な場所で、アイヌ文化を中心に、沙流川流域の自然、文化を子供たちに親しんでもらう色々な交流体験活動を行ってきた。

1981年から本会および東京学芸大学附属環境教育実践施設のフィールド調査、本会「<sup>のびと</sup>野人講座」、(財)森とむらの会による「多様なニーズに対応する森林の管理手法に関する調査研究」等で沙流川流域を訪れ、調査を行い、1998年「沙流川冒険学校」実施につながった。

この活動は「子供のための冒険学校」を基にしている。小学校3年生以上を対象に参加者を公募し、大滝村で実施していた「子供のための冒険学校」の発展の一つの形と位置づけている。また、埼玉県大滝村で取り組み、現在山梨県小菅村で展開している農山村エコミュージアム作りを、沙流川流域でも展開しようと試みた。二風谷をコアとして、沙流川流域の平取、門別、日高の3町を1つのエコミュージアムとして、その自然や人、文化に基づいたプログラムを実施する1つの場として沙流川冒険学校を考えている。エコミュージアムという考え方から、将来的には3町の共催として冒険学校実行委員会を作り、より良い形をとり、実施できればと考えた。

### 2. 目的

- ・沙流川流域の平取、門別、日高の3町の子供たちの交流および東京周辺の子供たちとの交流
- ・3町を1つのエコミュージアムとして、その自然や文化に基づいた環境教育プログラムの開発と実践
- ・3町の共同主催として「沙流川冒険学校」実行委員会<sup>※</sup>を作り、実施

※沙流川冒険学校準備委員会(案)

委員 貝澤 薫(二風谷、民宿チセ)

貝澤 かつえ(二風谷、民宿チセ)

東 順二(平取町教育委員会)

田中 里理(平取町役場産業課林務係)

松原 俊幸(平取町子供会育成連絡協議会)

福士 美鶴(平取町教育委員会)

加藤 憲一(門別町役場建設課)

千代 明(DNA2 画家)

木俣 美樹男(自然文化誌研究会、東京学芸大学附属環境教育実践施設)

小川 泰彦(自然文化誌研究会)

中込 卓男(自然文化誌研究会)

その他若干名

将来は、平取、日高、門別の3町共催として準備委員会を組織する予定であった。

### 3. 経過

#### ■第1期沙流川冒険学校

・1998年8月18日～22日

・参加者20名

・主な内容・・・二風谷ファミリーランドふれあい館およびテント泊。日高ケンタッキーファーム。チップサンケに参加。二風谷アイヌ文化博物館見学。山遊び。釣り。木彫体験。アイヌ料理作り。

#### ■第2期沙流川冒険学校

・1999年7月20日～25日

・参加者10名

・主な内容・・・二風谷ファミリーランドふれあい館泊。二風谷アイヌ文化博物館、沙流川歴史館見学。山遊び。釣り。木彫体験。アイヌ料理作り。トマト農家見学。トマト選果場見学。平取町教育委員会主催「親子自然教室」に参加し画家 千代 明さんの指導の元、流木アートを行った。

#### ■第3期沙流川冒険学校

・2000年7月20日～25日

・参加者10名

・主な内容・・・二風谷ファミリーランドふれあい館泊。二風谷アイヌ文化博物館、沙流川歴史館、二風谷アイヌ資料館見学。山遊び。釣り。木彫体験。アイヌ料理作り。平取町教育委員会主催「親子自然教室」は雨のため中止。しかし、教育委員会の方々のご好意で巣箱作りを体験できた。今回は、豊糠小中学校しよぬかとの交流ができたことが大きな収穫であった。体育館で自己紹介に始まり、互いに用意したゲームをいっしょに行った。子供たちはすぐに打ち解けた様子であった。今後とも交流を深めたい。

#### ■第4期沙流川冒険学校

・日時 2001年7月19日(木)～24日(火)

・参加者 小学校4年生～中学校3年生・・・9名

・おもな内容・・・

○平取町立二風谷小学校との交流(7月23日 10:00～13:30)

二風谷小学校は全校児童約30名の小学校であり、これまで全校をたてわりの2班に分け、「小さな小さなチセをつくろう」というテーマでアイヌの伝統的な家であるチセの模型を作ってきた。地元のチセ作りの技術を持っている方に講師を御願いし、ヤナギの木の皮剥き、結び方、屋根葺き等を指導して戴きようやくチセの完成となった。

今回このチセの完成式に参加するということで、冒険学校の参加者との交流を行った。今回の交流を行うに当たって、5月と直前の2回、二風谷小学校の校長先生、教頭先生をはじめとする教職員の方々と打ち合わせを行った。



## 【交流内容】

### ① チセの完成式

挨拶、自己紹介

チセ作りの今までの過程をビデオ等で紹介

土入れ

チセノミ(講師 貝澤 貢男さん)

弓矢を射る

感想発表



### ② 給食を一緒に食べる

### ③ 昼休みを一緒に遊ぶ(体育館でドッチボール等 をして遊んだ)

貴重なチセノミの体験や、食事や遊びを通しての交流は、非常に有意義なものとなった。

○ 親子自然教室「歴史を掘ってみよう」(平取町教育委員会主催)

7月 20日 10:00～12:00

今年で3回の参加になったこの親子自然教室は、毎回地元の家族の方々との交流ももて、非常に有意義である。今回は、遺跡発掘の現場で専門家から遺跡発掘の体験をさせていただいたり、鹿の角で黒曜石を加工して矢じりを作ったり、石を磨いて斧をつくったりする方法を見せていただいた。黒曜石のお土産まで戴き子供たちは大喜びであった。

○ 乗馬体験(新冠ホロシリ乗馬クラブ)7月23日3:30～5:30

乗馬体験は以前から行いたかったが、第1回目に引き馬を体験していたに過ぎなかった。門別町を訪れた際、乗馬をやるのならと進められていた新冠ホロシリ乗馬クラブは、新冠町の第3セクターで運営されている。昨年この乗馬クラブの取締役支配人の堀 政市さんとお会いでき今回実施に至った。体験乗馬というコースを行い、20分のレッスンと、20分の外乗のセットであり、子供たちは非常に楽しんでた。冒険学校では乗馬を使ったプログラムの発展を色々模索しており、次回も実施したいプログラムである。



▲ホロシリ乗馬クラブでの乗馬体験



▲ 遺跡発掘体験

■第5期沙流川冒険学校

・日時 2002 年7月20日(土)～25日(木)

・参加者 12名

・おもな内容

○ファミリーランドふれあい館宿泊。

○二風谷小学校との交流

今年で2回目である。今回は3年生以上の児童と一緒に学校のプールであそんだ。1時間30分ぐらいの交流会であったが、子どもたちどうし、また私たちスタッフともすぐにうち解けて楽しい交流会であった。交流会の後地元の3年生が私たちと一緒に釣りをするプログラムに参加してくれた。

○そのほか乗馬体験、博物館見学、釣り、アイヌ料理づくり(アイヌシト、イモシトルル、チタタップ)アイヌの山遊び、ウトナイ湖サンクチュアリ見学、石焼き等



## ■第6期沙流川冒険学校

- ・日時 2003年8月19日(火)～23日(土)
- ・参加者 11名
- ・主な内容
  - 二風谷小学校との交流
  - アイヌ文化体験(山遊び、料理作り等)
  - アイヌ博物館、インディアン水車等の見学
  - 釣り体験
  - 乗馬体験



▲大変お世話になっている民宿チセ



▲チセで飼っているポニー



▲平取町立二風谷アイヌ文化博物館



## ■第7期沙流川冒険学校報告

- ・日時 2004年7月21日(水)～26日(月)
- ・参加者 10名

・主な内容 第1表 日程 2004年7月21日(水)～26日(月)

| 日(曜)    | 午前                                            | 午後                                                  |
|---------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------------|
| 7/21(水) | 羽田空港集合出発 (移動)<br>新千歳空港着                       | 平取町着<br>16:00 開校式<br>17:00 釣り                       |
| 7/22(木) | 二風谷アイヌ文化博物館、<br>二風谷アイヌ資料館見学                   | 14:00～17:00 アイヌ語講座<br>講師 萱野 志朗                      |
| 7/23(金) | 10:00～12:00<br>二風谷小学校との交流<br>講師 貝澤 薫          | 14:00～16:00<br>木彫体験 講師 貝澤徹、<br>アイヌ刺繍体験<br>講師 貝澤 かつえ |
| 7/24(土) | 9:00～13:00<br>山遊び・アイヌ文化体験<br>講師 貝澤 薫          | 15:00～18:00<br>アイヌ料理づくり体験<br>講師 貝澤 薫、貝澤 かつえ         |
| 7/25(日) | 6:00～9:00<br>釣り体験<br>講師 高野 繁広<br><br>沙流川歴史館見学 | 11:00～18:00<br>乗馬体験<br>講師 新冠ホロシリ乗馬クラブ               |
| 7/26(月) | 片づけ<br><br>11:30 閉校式                          | 移動、解散(羽田空港)                                         |



▲釣り体験 釣った魚は 貝澤薫さんにお世話になって 石焼にして食べた うまい



▼アイヌ料理づくり体験

講師 貝澤 薫、かつえ さん



かぼちゃの種も無駄にしない。干して食べる。



かぼちゃで作る料理



シト作り。ゆでる。



貝澤さんによるアイヌ料理の解説



▼山遊び・アイヌ文化体験    講師    貝澤 薫 さん



▲大きなフキの葉。雨が降ると傘や帽子になる。



▲ イタドリの笛



▲ ブドウづるを利用してターザンごっこ





沢遊び。冷たいが気持ちいい



アーティスト千代 明さんの指導の下  
流木で作った動物のオブジェ



貝澤 薫さんのポニー。なごむ。

#### 4. おわりに

沙流川をカヌーで下ったり、幌馬車で馬に乗りながら1週間すごしたり、海外の少数民族との交流等やりたいことはまだまだある。なによりも、参加者減少のため、現在休止中になっているこの冒険学校を新しい形で近いうちに復活させたい。

(中込 卓男)



## 5. タイ環境学習キャンプ

タイと自然文化誌研究会のつながりは、1995年に遡る。タイ環境学習キャンプは、はじめは本会会員の東京学芸大学の木俣が、タイで環境教育の草分け的な存在であるラジャバト・プラナコン大学のラダワン女史と知り合いになったのを契機として東京学芸大学とラジャバト・プラナコン大学との環境教育交流キャンプとして実施された。第3回環境教育キャンプが行われた際にラジャバト・プラナコン大学の環境教育センターの先生たちと本会でラダワン女史を会長に Thailand and Japan Nature Club（以降 TJ クラブ）を結成し、それ以降 TJ クラブのキャンプとして行われるようになった。



▲第1回タイ環境学習キャンプ

第1回目から、第8回目までは、カオヤイ国立公園を初めとした各地の国立公園やマングローブ地帯、環境教育モデル校などをめぐり、タイの自然環境やその保護、学校教育現場で行われている環境教育について学習した。この間の特徴的な活動は、カオヤイ国立公園のサイチョウの観察から発展して、サイチョウの生態や特徴を楽しく学べるように、サイチョウの双六やパズル、ポスターといった環境教育教材を開発したり、マングローブ保護のためにマングローブ地帯の生態系が学べるトランプ教材の開発やマングローブの植樹などが挙げられる。キャンプが実施された範囲は、北はチェンマイ、南はチュンポン、西はカンチャナブリ、東はクン・クラベーン湾に及ぶ。



▲開発したサイチョウのポスター（カオヤイ国立公園でパークレンジャーたちに見てもらった） ▲マングローブの植林地

そうした中で、第7回目の環境教育キャンプが実施された時に、ファイ・カ・ケン野生動物保護区近くのバンライという街で活動するシリポン氏と知己を得た。シリポン氏は、WWF の職員としてその地区の自然保護のために活動していたが、WWF がその地区から撤退するにあたり、そこに留まりその地区の野生動物保護や環境保全のため継続して活動することを決意し、パンダキャンプという環境教育の場を作りそこで活動していた。

本会の方も、TJ クラブとしてタイ各地を視察する中で、継続して地元に着して交流できるカウンターパートナーを必要としていた。シリポン氏と本会はファイ・カ・ケン野生動物保護区とパンダキャンプを拠点として相互の環境学習のために交流を深めていくことに合意し、9回以降は、バンライのパンダキャンプを拠点として環境学習キャンプと実施されるようになった。

9回以降の活動の柱は、地元の子供たちを対象にした、環境学習や理科の授業、大人や先生を対象にしたワークショップ、ファイ・カ・ケン野生生物保護区での野生動物観察やバードウォッチングや自然観猿コーストレッキング、その地区住民やカレン族、ラオ族からの伝統的な文化や知恵の吸収である。

子供向けの授業では、ビーズ玉とペットボトルを使ったレーベンフック顕微鏡の製作、水生昆虫と水質調査、バナナから DNA を抽出する実験、自然の秩序の中に隠れているヒボナッチ数列を利用した絵画の製作、煮干の解剖、科学手品、ネイチャーゲーム、グループゲームなどが行われた。大人向けのワークショップでは、本会の拠点である小菅村の紹介、日本の河川管理のあり方、日本の伝統食の紹介、本会の活動紹介、アイヌ文化の紹介、ホームガーデンについて発表、原発や東日本大震災の問題等タイにおいても参考になるであろう様々な問題が意見交換された。

ファイ・カ・ケン野生動物保護区では、バンテン、吠えジカ、サンバー、シーベツト、テナガザル、オオカワウソ、イノシシなどを観察したり、トラやヒョウやゾウの足跡や糞を見つけたり、様々な昆虫を観察する。バードウォッチングでは、サイチョウ、マクジャク、カワセミ、ドロongo、インディアンローラー、キツツキなど色とりどりの鳥類を観察できる。また、実際に保護区を守るレンジャーから野生動物保護の実態についても直に話を伺ったりした。

少数民族との交流では、伝統的な踊りや歌、楽器、竹工芸、織物や衣服、作物、薬草、食文化、信仰などを様々な特徴的な文化を学んできた。



シリポン氏は、現在持続可能な社会を目指して自分の敷地に樹を植える育てることによって環境保全を図るファミリーフォレストという活動を行ったり、少数民族の伝統的な知恵である薬草の知識を地域発展の為に生かそうという活動も行っている。

本会の小菅村での活動も農山村文化を学び、それをいかに伝えていき地域の発展につなげていくかという所に大きな目標がある。タイ環境学習キャンプは相互の信頼関係の上に長く続けられてきた活動である。ある意味では、今までの活動を振り返りまとめる時期に来ていると思うが、その上で今後、私たちの活動が小菅村とバンライの地区同士の交流やタイの少数民族とアイヌ民族との交流等に発展していくようにしていきたい。



▲ファイ・カ・ケン野生生物保護区



▲少数民族ラオエンの子供たちによる民族舞踊



▲発酵食品のワークショップ（2015年）



▲ カレン族の家を訪れて植物利用の聞き取り調査

## タイ環境学習キャンプの歴史

| 西暦   | キャンプ                       | 主な訪問先                                         | 主な活動                                                                       | 環境施設との関係                                                              |
|------|----------------------------|-----------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 1991 |                            |                                               |                                                                            | ・タイ環境研究研修センターから研修者を受け入れ(JICA による)                                     |
| 1992 |                            |                                               |                                                                            |                                                                       |
| 1993 |                            |                                               |                                                                            | ・タイの科学技術教育開発研究所から視察団(UNESCO による)                                      |
| 1994 |                            |                                               |                                                                            |                                                                       |
| 1995 | 第1回環境学習キャンプ<br>(8/24～27)   | カオヤイ国立公園<br>水上マーケット<br>サムット・ソングラームのマンガローブ     | ・ナイトサファリ<br>・ネイチャートレイルでの観察会                                                | ・第1回アジア太平洋環境教育シンポジウム開催(東京)に招待<br>・環境教育施設と環境教育センター間の協力関係を開始            |
| 1996 | 第2回環境学習キャンプ                | カンチャナブリ                                       |                                                                            |                                                                       |
| 1997 |                            |                                               |                                                                            | ・東京学芸大学とラジャバト・プラナコーン大学は学術交流協定を結ぶ                                      |
| 1998 |                            |                                               |                                                                            | ・第2回アジア太平洋環境教育シンポジウム開催(東京)に招待<br>・UNESCO 日本アジア太平洋環境教育セミナー開催(文部科学省と共催) |
| 1999 | 第3回環境学習キャンプ                | サムット・ソングラームのマンガローブ<br>チェンマイ<br>ドーイ・イン・タノン国立公園 | ・タイ日自然クラブ(TJ クラブ)創設<br>・マングローブの植樹<br>・山岳民族の村訪問<br>・タイの最高峰登頂                | ・ラジャバト・プラナコーン大学に大学院に環境教育コース創立。以降客員教授として毎年講義「環境教育の思想および日本の研究事例」を担当     |
| 2000 | 第4回環境学習キャンプ<br>(3/26～3/31) | サムット・ソングラームのマンガローブ<br>カオヤイ国立公園                | ・環境教育シンポジウム<br>・サイチョウの観察<br>・ネイチャートレイルでの観察会<br>・マングローブの炭焼き見学<br>・マングローブの植樹 |                                                                       |
| 2000 | 調査旅行<br>(8月)               | サギの営巣地<br>貝の化石の仏塔の寺                           | ・環境教育実践モデル校の訪問<br>・サギの観察                                                   |                                                                       |



|      |                           |                                    |                                                                                                                                                           |                                                                              |
|------|---------------------------|------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| 2001 | 第5回環境学習キャンプ<br>(3月)       | サムット・ソングラームのマン<br>グローブ<br>カオヤイ国立公園 | ・サイチョウの観察<br>・サイチョウ教材の開発(双六、<br>パズル、ポスター等)                                                                                                                | ・第20回環境教育セミナーに招<br>待<br>・双方の大学院講義でネットミー<br>ティングを開始                           |
| 2002 | 第6回環境学習キャンプ<br>(8/2～9)    | ナム・トック・カポ国立公園<br>シー・ナカリン国立公園       | ・マングローブ教材の開発(トラ<br>ンプ)<br>・ネイチャートレイルでの観察<br>会<br>・タイ・ミャンマー国境訪問                                                                                            | ・「新千年紀の環境教育に関す<br>るワークショップ(バンコク)」で基<br>調講演<br>・タイにおける精霊の祠に関する<br>調査研究への協力を得る |
| 2003 |                           |                                    |                                                                                                                                                           | ・東京学芸大学とラジャバト・プラ<br>ナコーン大学は学生交流協定を<br>結ぶ                                     |
| 2004 | 第7回環境学習キャンプ<br>(8/17～24)  | ファイ・カー・ケン野生動物保<br>護区<br>プン・ポーラペット  | ・ホテルの観察<br>・果樹園の見学<br>・カレン族の村の訪問<br>・遊水池での野鳥の観察                                                                                                           |                                                                              |
| 2005 | 第8回環境学習キャンプ<br>(8/15～22)  | ファイ・カー・ケン野生動物保<br>護区<br>クン・クラベーン湾  | ・カレン族の村の訪問<br>・果樹園の見学<br>・マングローブ地帯の観察                                                                                                                     |                                                                              |
| 2006 | 第9回環境学習キャンプ<br>(8/5～13)   | ファイ・カー・ケン野生動物保<br>護区<br>バンライ       | ・ワット・プラ・ナオン水族館見<br>学<br>・HMDステーション地域の野<br>生動物観察<br>・カオ・クロング・チャイ蝙蝠洞<br>窟の観察<br>・ランサク、ウィッタヤ環境教育<br>モデル校視察<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・ラオ ヴィエング族、カレン族<br>の文化と生活の学習 |                                                                              |
| 2007 | 第10回環境学習キャンプ<br>(8/20～26) | ファイ・カー・ケン野生動物保<br>護区<br>バンライ       | ・水牛村訪問<br>・HMDステーション地域の野<br>生動物観察<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・ラオ ヴィエング族、カレン族<br>の文化と生活の学習                                                                       |                                                                              |

|      |                              |                          |                                                                                            |                                                                             |
|------|------------------------------|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 2008 | 第 11 回 環境学習キャンプ<br>(8/16～24) | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・サイ・ブル滝レンジャーステーションでの野生動物観察<br>・カレン族の文化と生活の学習<br>(織物体験)<br>・環境教育交流ワークショップ                   |                                                                             |
| 2009 | 第 12 回 環境学習キャンプ<br>(8/15～24) | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・サカエクルング川クルーズ<br>・タ・スング寺<br>・カレン族の文化と生活の学習<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・HKK HQ での野生動物観察<br>・竹工芸体験 |                                                                             |
| 2010 | 第 13 回 環境学習キャンプ<br>(8/14～23) | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・HKK HQ での野生動物観察<br>・カレン族の文化と生活の学習<br>・環境教育交流ワークショップ                                       |                                                                             |
| 2011 | 第 14 回 環境学習キャンプ<br>(8/13～21) | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・プアイ蝙蝠洞窟、巨木見学<br>・カレン族の文化と生活の学習<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・HMDステーション地域の野生動物観察                   | ・ラジャバト・プラナコン大学との大学院共同研修(10月4日～10月29日) オリンピックセンター、環境教育実習施設、山梨県小菅村「植物と人々の博物館」 |
| 2012 | 第 15 回 環境学習キャンプ<br>(8/18～27) | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・カレン族の文化と生活の学習<br>・ラオウエン織物見学<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・HKK HQ での野生動物観察                         |                                                                             |
| 2013 | 第 16 回 環境学習キャンプ<br>(8/17～26) | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・カレン族の文化と生活の学習<br>(食文化交流)<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・HMDステーション地域の野生動物観察<br>・ナイトコンサート            |                                                                             |
| 2014 | 第 17 回 環境学習キャンプ<br>(8/9～18)  | ファイ・カー・ケン野生動物保護区<br>バンライ | ・カレン族の文化と生活の学習<br>(食文化交流)<br>・環境教育交流ワークショップ<br>・HKK HD での野生動物観察<br>・ナイトコンサート               |                                                                             |

(中込 貴芳)

## 6. おきなわ冒険学校

沖縄冒険学校は名称の通り、沖縄本島の読谷村で開催しました。読谷村には NHK 大河ドラマ「琉球の風」で使用したロケセットがそのまま残っており「むらさき村」という名称に変更。読谷村が運営しております。映画のロケセットを利用した建物では、シーサー作り・缶からさんしん作り・染物・ビーチクラフトなど様々なプログラムが用意されています(有料)。今回はそこでのプログラムを体験することも冒険学校のプログラムとしました。また、現地にある NPO 法人インフォメーションセンターにコーディネートしてもらい海でのプログラムも行いました。

(田之下雅之)



## 7. 小菅村での取り組み

大滝村での活動を終えた本会は、解散するか？縮小して同好会にするか？新たなフィールドで活動を展開するか？—議論を重ねた末、2002 年に、前事務局長の小川泰彦から、現事務局長の黒澤友彦へ交代。2002～2003 年は、「ぬくい少年少女農学校」を東京学芸大学環境教育実践施設(旧農場)にて開催した。

2004 年に現在のメインフィールドである、山梨県小菅村に古民家を借り、事務局を小菅村にする。きっかけは、古くは 30 年前になる。木俣美樹男教授が上野原～桐原～西原～小菅村まで雑穀の調査を行っていた。その弟子である井村礼恵さん(あべちゃん)が生活文化の調査を行い、在住した小菅村。

これまでと異なる点は、村内に民家を借りて、事務局が住むことになった。

小菅村での最初のキャンプは、12 月末の「まふゆのキャンプ」。以前に開催されていた「クリスマスキャンプ」よりも、野外をベースにしたキャンプとした(小菅村で最初のキャンプが真冬だったので、村の人達からは相当な物好き集団と思われたようです)。

GW に、小菅村の「多摩源流まつり」に合わせて、「冒険学校 むらまつりキャンプ」として 2 泊 3 日を開催し継続中。年末の「まふゆのキャンプ」も継続中。当初、夏休み中の冒険学校は「やせいキャンプ」として 2004～2005 年に開催。この準備期間を経て、2006 年より「こすげ冒険学校」と改名して、6 泊 7 日とし、2015 年までに 10 期を継続している。

また、「エコミュージアム日本村」構想で、小菅村中央公民館を「植物と人々の博物館」として整備を進め、小菅村をはじめ秩父多摩甲斐国立公園を中心に伝統智の研究・普及事業も展開している。

(文責: 黒澤友彦)



### 冒険学校を続ける意味を探して

雫 永法

私が自然文化誌研究会の主催するキャンプに再び参加したのは2012年のことだった。大学に在学中より十数年間冒険学校には参加していたが、奥秩父での活動に区切りを付けてからはぬくい少年少女農学校の手伝いをしたのを最後に足が遠ざかっていた。その個人的な理由に奥秩父でのキャンプ活動の印象が自分自身の中に色濃く残っていたということがある。新たな拠点でのキャンプ活動をどのように形づくっていったらよいかイメージすることが難しかったからだ。

2012年に久しぶりにキャンプに参加してみて、活動内容やスタッフの参加形態が随分と様変わりしているように感じた。感じただけではなく、今考えるとかなり自分勝手に横暴な意見を事務局にぶつけたように思う。

しかし事務局の黒沢と再会し行動を共にする中で、現在の活動拠点である小菅村で様々な方々と親交を深めながら地域に根ざしたネットワークを築いてきたことが痛いほど伝わってきた。縦横無尽の働きだったことは想像に難くない(パートナーである東江さんの計り知れない支えにも感謝である)。そして、地道に自然文化誌研究会の活動を支え続けてきたスタッフの方々の苦勞や、カリキュラム的にも時代背景的にも多忙になってきている学生の方々の純粋な想いや大変さを思い知らされた。自分に今何ができるかを問い直す貴重な機会をいただいた。



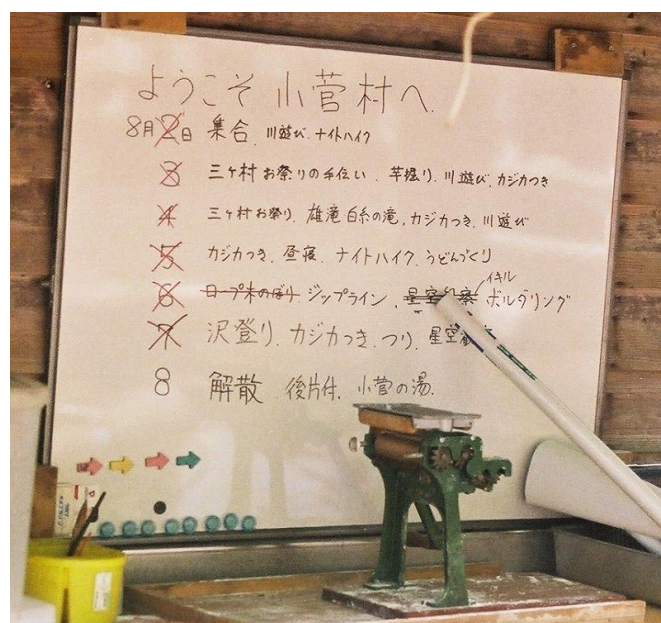
それ以来、数年間ではあるが時間をつくれる時には小菅村に通い、村の内外を問わず関わりのある方々との交流を重ねてきた。そして村の文化や自然と共に生きていく知恵を少しずつ学んでくることができた。実りの秋には目を皿のようにしながらキノコを探し、突然舞い込むシカの解体仕事を手伝わせてもらい、クマや蜂との遭遇話に震えながら聞き入り、炭焼きの準備に汗を流し、自然からの恵みに舌鼓を打つ……。冒険学校でもそういった交流の中で体にしみこんできた何かがいろいろな形で生かされているように感じる。

キャンプ活動に参加するからには有形無形関わらず、最大限に楽しみながら付加価値を見つけていきたいと考えている。人それぞれの楽しみ方があるし、その多様性を内包している自然文化誌研究会のキャンプはやはり魅力がある。しかしその楽しみ方や多様性を身をもって経験し、様々な引き出しを持っている方々の参加が少なくなってきたという現状がある。

かつての大学公開講座としての冒険学校は【ジュニアリーダー育成】という目的（他にもいろいろな意味づけもある）を果たしピリオドを打ったかもしれない。しかし、子どもたちそして学生たちは現在も毎年いろいろなかたちで参加してくる。そして、主にキャンプ期間を通じて様々なことを感じ、楽しみ、学んでその経験を身体にきざんで帰っていく。そういった意味で自然文化誌研究会主催のキャンプは現在進行形で大きな意味を持っていると感じる。

自分たちで何十年にも渡って最も大切にしようと謳ってきたルールをないがしろにし、勝手なルールが強行採決されようとしているようなこの時代にあって、自然と共に生を営み自然の中からルールを感じ学びとっていくこの活動の価値は非常に大きいと改めて感じる。

最後に、様々な事由により活動から遠ざかっている方々にもこれまでに培ってきた経験や知恵の引き出しを是非とも今の子どもたちや学生に還元していただきたいと願う。彼らはこれから先、それぞれの生活場所で自然文化誌研究会のキャンプで得たものをさらにひろげていくと感じるからである。



## 8. ELF 環境学習中堅指導者(のびと)養成講座研修会

1988年第2回清里フォーラム(現在「清里ミーティング」)に参加し、第一期の冒険学校について佐藤雅彦が発表し、参加者から多くの反響を呼んだ。その後数回清里フォーラムに出席した。このころ環境学習の指導者養成の必要性がよく議論されていた。初級指導者のための議論であった。その時、私は中級指導者養成について必要性を主張したが、参加者は興味を示さず、議論にもならなかった。「中級は自分で努力して身につけるものだ。」「そんなものは・・・」といった具合であった。中級、さらに上級指導者の養成についてはずっと温め続けていた。

10数年がたち、中級指導者養成について議論されることが多くなり、CONEやNELEno自然体験活動指導者の認定制度や各県唐で環境学習指導者の認定を行い始めた。

「冒険学校」を初めていろいろなプログラムを考え、教わり、実施してきた。その中でELF (Environment Learning Framework)環境学習課程として木俣美樹男がまとめた。(木俣美樹男 1992, 2009)ELF環境学習プログラムの内容についてはここでは触れないが、このプログラムは伝統的な知恵の継承と再創造を目指している。

自然文化誌研究会には自分たちの向上のために「野人(のびと)講座」を実施している。さまざまな実技講座を行ってきた。「冒険学校」は、環境学習のジュニアリーダーの養成を行っていた。さまざまなメンバーとの議論、実践の中で、ELF環境プログラムによる統合的な環境学習中堅指導者養成「のびと」の認証を行っている。「のびと」は、私たちがフィールドとしている秩父多摩甲斐国立公園で、活躍できる環境学習指導者の専門職を目指している。(中込 卓男)



## 8、討論～冒険学校とは・・・？

中込メ: 中込卓男(本会代表理事) 佐藤: 佐藤雅彦(副代表理事) ヤス: 小川泰彦(前事務局長)

中込ミ: 中込貴芳(副代表理事) 木俣: 木俣美樹男(自然文化誌研究会創設者)

中込メ) 僕は五日市で教員だった。子どもたちは川遊びのみで森には行かなかった。TV ゲーム・塾なども普及。かなり意図的に遊びながらやっていくのが必要と感じた。探検部・・・お互いに緩やかな関わりで、パイオニア・ワークが元々だった。実験的な試みとしてのキャンプ。ボーイスカウトなど規律系が多い中で、文化的なキャンプを展開していった。アリとキリギリスならキリギリス。もちろんアリも必要だが。冒険学校の狙いは・・・将来、中級とか指導者養成を仕事。日本で活動している多くの人たちは、アメリカとかのプログラムを借り物でやっている。日本のものをやりたいね。元々農村で、フィールドを持って活動しているから、日本型。自負だが、すごい団体である。清里にも全然負けてないよ。

佐藤) 自由・・・感覚的な自由・子どもの感覚を自由にしたい。出来るだけ大人は手出ししない。口出ししない。見守るだけでいい。新米教員が、「自由にやっていいというマニュアルが欲しい」と言う事件。自由というのは実は厳しい。自分も自由だが、他人も自由。すごく大変なことだ。子どもたちの自由は自分勝手。自由になっていくのは難しい。学校で現在行っていることは、答えのあることばかり。智恵・工夫の隙がない。子どもたちをほっぽり出すぐらいでないと、智恵・工夫は育たない。

中込メ) 見て覚える。やって覚える、貝沢さん(北海道二風谷)。元々アイヌは文字をもたない。そうやって伝承している。彼にメモ・VTR はダメと言われた。10 年通ったらメモいらなくてできる。伝承者になりたい。

挫折のプログラムもないと将来大変だ。キチキチでやっているとい回のミスで潰れてしまう。僕らの活動は伝えたい。

ヤス) 人の歴史だけでなく、生物などの営みを含むと「誌」らしい。

「継承者を育てる」というのが一番だったかな。東京の子どもたちは東京の自然と文化を継承して欲しい。

地元の子どもたち・が学べる。地元の人たちが自然や技術を分かっていない。継承できない。「出来るじゃん！」という話。

中込ミ) いいつながりなのは分かっているけど、無くなったらおしまいかも。補欠がない。

顔のわからないつながりはない。だからこそ地元の後継者を作るのが仕事。

「持続不可能な環境学習(笑)」 「旅人のような集団だ。楽しい」

自分でフィールドを見つけていくのが大切なのかな。

ヤス) 若い衆がいるのは違う。中津川は子どもがいなくなってしまった。大きくなったら出て行ってしまった。人の顔が見える範囲で続けていくのかなー？この会は。実質的な未来の姿の想像は良しとして。



木俣)タイも沙流川も地道に続けるという話なんですよ、僕らも十分楽しみたいよ。  
少なくとも基本的な考え、僕らがその場所で興奮できるか？新しいものを作っていくことで僕らも楽しむ  
ことが出来るわけだから。全ての活動は転々として存在しているわけではなく繋がっている。  
出来ればもっとつなげていきたいなー。

こっそり細々会員制高くするとか？

冒険学校やっている人で連絡会を作ろうか？っていう話が昔あったよね。

基本的には宗教かな？

修学旅行の受け入れとか？

(2005 年 5 月 7 日 東京学芸大)





## 9. 終わりに（謝辞にかえて）

4・5歳のころだったろうか、三輪車に乗って冒険の旅に出た。冒険といってもそんなに大袈裟なものではない。近所をキコキコいっている内に、見慣れたものとは違う景色が見たくなっただけだ。「この先の曲がり角をまがると、どんな景色が見れるかな・・・」。そして「見てみたい！！」。そんな衝動に駆られて必死に三輪車をこいだ。民家の間の道から大きな道路に出た。初めての冒険だ。すぐ横を通り過ぎるトラックの風圧はちょっと怖かった。大好きだったウルトラセブンの歌を大きな声で歌いながら、三輪車をこいだ。帰り道がわからなくなっていることなんか頭には無かった。「もっと見たい！」ただその気持ちで、ペダルをこぐ足に力をくれた。見知らぬ曲がり角を曲がってみると、見たことも無い木や家、川や山の景色。夢中だった。帰ることなんかこれっぽっちも考えていなかった。興奮していた。その時の肌を感じる風やあたりに漂う匂いまで、今でもはっきりと覚えている。ほどなく、大慌ての母の知らせを受けて、探し回ったおじさんの車に私は無事捕獲？された。

冒険と教育が融合した新しい形として、1988年に冒険学校は始まった。当時としては宿泊が約1週間という異例の長さ。食や農の文化的な要素を取り入れた画期的な環境学習の方法、地域のつながりをメインに置いた野外体験活動。各方面のプロフェッショナルを引き込んでの活動内容。参加者とほぼ同数の充実したスタッフの体制。すべてが新しく新鮮だった。参加者はもちろんのこと、私たちスタッフが興奮していたのだと思う。冒険学校は回数を重ねるごとに、いろいろな新しい試みやアイデアを盛り込んでいった。その冒険学校も14回を数えた。このスタイルの野外活動は、カタカナに名前を変えたり、方法を少し変えたりはしているが、今、ちまたにあふれかえっている。夏の前のいろんな所から届くキャンプや野外活動のお誘いチラシをながめて見るとつくづくそう思う。

そうして冒険学校は幕を閉じた。理由はもちろん「新しい景色を見るため」だ。あまりにシンプルすぎて、たくさんの方々の気持ちや思い出を育んだ冒険学校を辞める理由としては、すこし無責任なものに感じるかもしれない。しかし、「見てみたい！」のだ。「新しい景色を見るため」の活動はすでに始まっている。NPO 法人自然文化誌研究会として再スタートを切った私たちは、次にどんな景色を見ることができるのだろうか。

この「冒険学校のあゆみ」作成のために、多くの方々が原稿を執筆してくださいました。なつかしい参加者の方々やスタッフが、アンケートに答えてくださいました。また、冒険学校に直接関わっていない新しいメンバーまでデータの入力や打ち込みをしてくれました。本当にありがとうございました。



小川泰彦

## 編集後記

「はじめに」を読んで気づかれたかもしれないが、日付が「2005. 8. 8」となっている。これは「2015. 8. 8」の間違いではない。原稿依頼の締め切り通りだと、2005年にはこの「冒険と子どもたち」は出来上がっていたのである。が・・・である。「9. 終わりに」にも同様、10年前に書かれた謝辞である。編集者もかわり、毎回の運営委員会の議題に上ってはいたのだが・・・。

じつは、これ以前にも「冒険学校十周年記念誌」を作ろうという話があり、「楽しくて役に立つもの、第三者が冒険学校を新しく行う際に十分役立つこと(マニュアル的)、あまり内輪的なものはやめるが僕らにとっても記念となり楽しめるもの、すでにキャンプをやっている人たちにとっても役に立つもの、写真・イラスト・図表等を多くして視覚的にもわかりやすく工夫する、自費出版あるいは補助金をもらい出版、」そして最後に「1997年度内に入稿」とある。

ともあれ、やっと編集後記を最後に書いている。まだ未提出な原稿は、第2版、あるいは別冊という形にするしかないと勝手に決めることにした。この夏も「こすげ冒険学校」が開かれた。10月には「第35回環境学習セミナー」が開かれ、40周年を記念する今までの軌跡が明らかになる。「常設の冒険学校」を思い描きつつ、またぼちぼちと歩んでいくのだろう。

中込 卓男



# 冒険と子どもたち

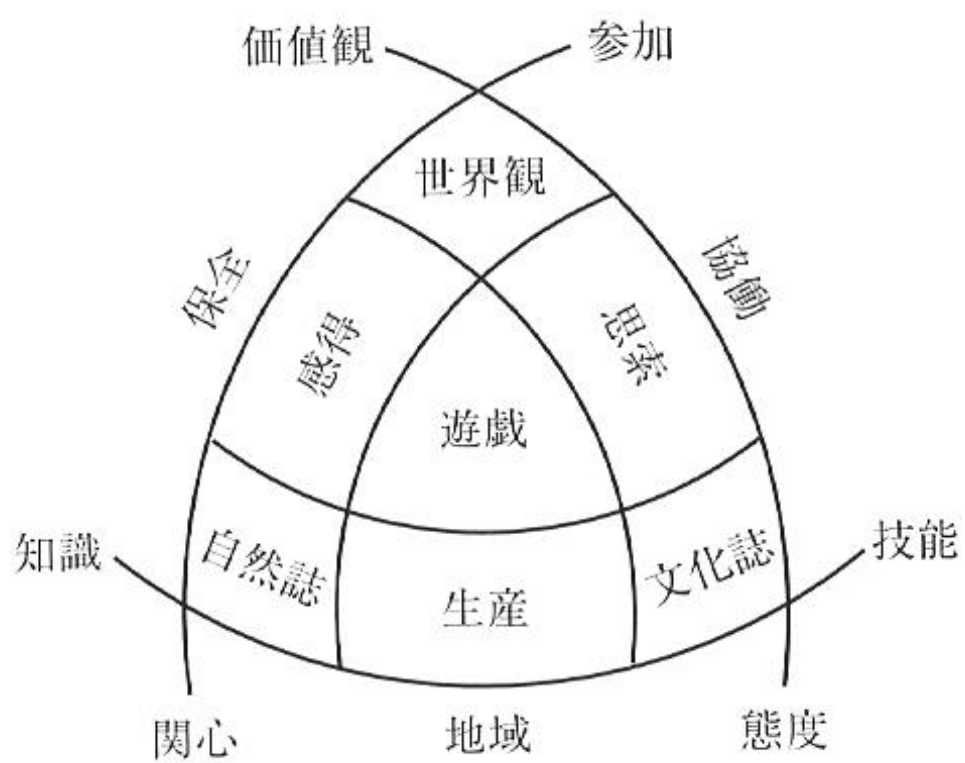
## 「冒険学校」のあゆみ

発行日 2015年10月10日 初版第1刷発行

編集委員 中込卓男 中込貴芳 木俣美樹男 小川泰彦 岩谷美苗 黒澤友彦

発行 NPO 法人自然文化誌研究会 東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部

〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 4581 植物と人々の博物館（小菅村中央公民館）



**NPO 法人自然文化誌研究会**